大正二年三月五日發行

婦人と子ども

第十三卷
第三號

フレーベル會

第十三卷第三號目次

情の觀察　佐々木吉三郎
國民祭　垣内松三
少女エビー　岡田みつ
玉ちやんの一年　芙蓉峯
小兒の傳染病　石塚保吉
幼稚園の增設を望む　藤田東洋
坊やの創作　若き父

附錄

美學講話（第二回）　菅原教造

本誌定價

一冊郵稅共金拾壹錢　六冊前金郵稅共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢　郵券代用一割增

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に御送本致します。（振替口座東京一七二六六番）

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます
（庶務上保姆紹介に關する件をも含む）の御手紙は
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事務所宛
會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園內、雨森釧宛
本誌編輯の御用務（寄稿、廣告等）は東京府下千駄谷八七八倉橋惣三宛

大正二年三月二日印刷
大正二年三月五日發行

東京府豐多摩郡千駄谷町大字千駄谷八七八
編輯兼發行者　倉橋惣三
東京市本所區番場町四番地
印刷者　井平登
東京市本所區番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市小石川區久堅町七十四番地　フレーベル會

緊急會告

一、來る四月廿日(第三日曜日)午前九時より東京女子高等師範學校内に於て本會第拾八回總會相開き候。詳細は本誌次號に於て御報可申上候へ共當日は午前午後に亘り議事、講演、懇談、陳列等有之候筈多數諸君の御來會を希望致候

一、當總會を機とし本會規則の二三改正に就き御協議致度く、規則には「此規則は會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ズ」と有之候へ共實際上全國會員諸君に御賛否の確數を問ひ候ことは甚難事に有之候間「總會出席會員ノ三分ノ二以上(以下同じ)」と改正致度く此段誌上を以て御同意を希候、若し御不同意も候はゞ三月廿日迄に御意見御申越下され度特に御申越なき時は御同意下され候ことゝ認め本年總會より之れに從ひ候

三　月

フレーベル會

保育講習會廣告

一、三月二十二日より三日間（毎日午後二時半より三時間）

一、大阪市東區浪華小學校に於て

一、『幼稚園教育の研究』（西區保育會主催講習會に於ける講義のつゞき）　倉橋惣三氏

一、會費　金五拾錢

一、申込　大阪市東區南久太郎町浪華小學校内保育講習會事務所

三月

大阪市南東北三區保育會聯合主催

婦人と子ども

情の觀察

東京高等師範學校教授　佐々木吉三郎

第十三卷第三號

一、子供は情の對象たるべきもの

子供は我々の智の對象たるものでなく、情の對象であるべきものである。これは子供を持つた親の態度である。從つて又教育者の態度であると思ふ。子供を智の對象としてばかり觀ると、誠に矛盾の多い、譯のわからない、駄々をこねまはすものに觀える。けれども情を以て觀ると、皆一々尤もな理由が現はれて來る。然るに親であつて、無暗に子供を理窟でとりすべて、理窟攻めにさへすればそれで訓誡も、說諭も徹底したものと思ひ込んで居るものがある。殊にまだ子供をもつた事のないものが、貫ひ子などに對する教訓の仕方を見るといつも此の樣なのが見つかる。「昨日云つてあげた事がわかりましたか」「解つたのならなぜしませんか」と云ふ樣な事の連發で、子供を論理的に征服しやうと思つて居る。又若い教師などでも往々斯樣な筆法で訓誡をして、「なぜ未熟な果物を食ふたか」「生梅を食ふてはいけないと云ふ事を知らないか」「こんなものを食べてよいと思ふものは手を揚げろ」など、云ふ樣に、理窟さへこね廻はせばそれで教へがたつものと思ふて居るが、これはまだ一知半解の徒たるを免れない。知ると云ふものは、

人間の心の全部ではない、知つた事が必しもすぐその人間を支配して、必ずその通りに實行させるものではない、そういふものならば世の中は誠にやさしいものであるが、それは到底その通りには行かない。

兒童の研究上にも、科學的の研究と審美的の研究とある。此の審美的と云ふ言葉は獨逸のウエーバー氏の使つた文字であるが、畢竟情で觀ると云ふ事に外ならぬのである。それで今智的研究卽ち科學的研究と情的研究卽ち審美的研究との大體とをお話して兒童を觀察研究する人々の參考に供したいと思ひます。

二、科學的研究とは斯の如きこと

科學的研究とは或る見地から觀て缺くべからざる要素と見做されたるものだけ拔きとりて、その外の要素は先づこれを捨て去り、必要とされたる子共通の要素を合體して一の概念だとか、理法だとか原則だとかに纏めるものである。例へば酒類を研究してみると、どの酒にも共通な主要成分と見做されるものがある。それを見出して、凡そ酒類の中には共通の主成分として、アルコールと云ふものが存在すると云ふ事を發見する。又同じ酒、葡萄酒なら葡萄酒を研究しても度々の分析の結果アルコールが百分の幾つ、水が百分の何十等と分折表を揃へて見て、夫れを、平均したものをその葡萄酒の成分と見做す。それであるから主要成文でないものを除外して捨て去るか、又は成分を盡く檢査する場合でも、決して或る一回の分折で滿足せずに數十回の分折を平均してそこに又共通點を見出して行くものである。それであるから何時も抽象的に一般共通的になると云ふ長處があると同時に他の一方に於て個々のものを度外視し、一つ一つの場合と云ふものを眼中に置かないと云ふ短所を現はすものである。それであるからいくら科學的分折が細かく出來ても、それは研究の一の方面たるに過ぎない、卽ち分解的、分折的抽象

的方面の研究たるに過ぎないもので、他の方面では我々の綜合的構成的の研究が必要なのである。酒を分析して研究する外に、酒の醸造法を考へなければならない。即ち壊す方の研究ばかりでなしに、造る方の研究をしなければならぬ。分析が如何程細かく出來ても、それを合したゞけで良い酒は出來ぬ。アルコールや、水や、他の科學的成分の外にバクテリアが何十萬匹はいつて居なければなるまいし、いろ〳〵な有機的の混りものがはいつて居なければ酒らしい酒とならない。それは科學的成分だけではわからない。無論將來科學が進歩したならば、その有機物までそつくり解る樣な方法が發見されるのかも知れないが、今日の科學的智識の程度ではそれは出來ぬことである。藥品など入れて分析して居るうちにバクテリアなどは死んでしまふ。それでは到底よく解りさうにもない。

我々が家事や生理書などで保健食料など云つて澱粉質何匁、蛋白質何匁、脂肪質何匁、糖分いくらなど、定めるが、それだけを匙でまぜまぜにして飲んだら、一番立派な身體が出來るかと云ふと決してそうではない。

それ故に科學的分解はなるべく精細に進まねばならぬと同時に、酒で云へば酒屋のとうじが要る。料理で云へば上手な料理番が要る。此のとうじや料理番は今日のやうな科學的智識をもつて居るに越した事はないが、併し持つて居つたにせよ、それだけではいけない、更らに今日の科學の到達し得ない部分を從來の人々の經驗や、自分の經驗に由つて補充して良い酒、旨い御馳走を拵へ上げると云ふ一種の技能を要するのである。既に世の中に存在するものを對象として、科學的研究を加へるのと、まだ無いもの、又は我々の理想に近いものを作り出さう、或はそこに導いて行かうと云ふ働らきとは勿論別の働らきであつて、多少共通の點はないではないが、大部分違つたものである。

運慶の作の仁王樣を捉まへて、眼の玉の大さは何寸に何寸、眼と眼との距離は願より額に至る迄の何分の一で、眼の玉の白眼と、黑眼との割合が五と三との割合であるなどゝ精密に釣合を調査し更らにこれに塗つてある赤漆は十兩何匁、その下の砥粉がいくら、木材は何々の木でその成分を分析すると炭素がいくらで、水素がいくらだなど、云ふ事を研究してみるのも決して不必要とは云はないが、斯くの如き研究はその仁王樣を、科學上の分子にめちや〳〵にしてしまふだけのものである。今度どうぞ勇ましい逞ましい仁王樣を作つて下さいと云つて水素や、炭素や、砥粉何匁、赤漆何匁木材何貫持つて來た處で決して活々とした仁王樣がすぐは出て來ない。畢竟物質的に或は物質科學的に吟味しただけでは生命と云ふものはわからない。勇ましいと云ふ狀態は眼の玉の白黑の割合だとか、水素と酸素との調味加減だとか云ふことではわかるものではない。

然らば生理學者にでも聞いたら解るかと云ふと生理學者もやはり一種の科學的研究者で、人間が興奮した時は血液の循環が平時よりも數倍旺盛になるとか、脈の數がどれだけ增すとか、呼吸がどれ程增すとか、要するに既に出來た或る人間の生理的狀態を調べることはするけれども、勇ましい姿をこゝに現はすことは出來ない。たとひ外の幾多の物質科學者と共同しても出來つこはない。轉じて心理學者に聞いても、それは解らない。心理學者は勇ましい場合の表情には、どんな種類があるかを分類してみることは出來やう。その寫眞なり、彫刻物なりを澤山集めることも出來やうけれど、頭や、體の筋肉其の他の模樣を比較して勇ましい時の眼玉はどつちを向くとか、笑つて居る時のと比較して眼の格好がどう違ふかを調べることは出來やうが、これ以て既にあるものを分析的に精密に調べるだけで、笑はせやう、怒らせやうのと云ふことを心理學者はちつともするものでは

ない。

四、審美的研究の必要

そこで私はやはり審美的研究と云ふものが要ると思ふ。つまり科學的研究が物を壞してその要素を觀るに努むるに對して、寧ろ組み立てる、作ると云ふ方を考へ、前者が物事を分解するに對して、後者は綜合をする。前者は物を殺すに對して、後者はこれを活かす。前者は物事を平均し、抽象するに對して後者はそのまゝに觀、個性的に觀る前者は智で觀るに對して、後者は情で觀ることが必要であると思ふ。

そこで科學的研究は誰れ一人もこれを望むことは困難であつて、それ〳〵專門的の修養ある人でなければ結果を得る事か困難であるけれども、審美的研究の方は直觀的、又は直覺的に子供の心を讀んで行くのであるから、子供をもつた親には、少しの注意さへ用ひれば、直に出來るものである。泣いて居る子供を見て、これは悲しいのか、可笑しいのか、心理學者に行つて尋ねて來なければ解らないと云ふものではない。怒つたやうな顏だとか、泣つ面だとか云ふのは大抵素人でも解ることで、心理學者程精密な理法は心得て居らないけれども具體的の場合に就て、その心持を察して觀ることは素人に出來ることである。それで普通の人であつたならば、よく氣を附けて子供を觀察すると大概のことは解る、若し暇々に心理學書を讀むならば、殆んど遺憾なく解釋がつくのである。全くそう云ふ學理を知らないものでも、經驗的に實地に當つて、なか〳〵よくさばきのつくものであることは、植物學を知らない植木屋、鑛物學を知らない彫刻家の例を思へばすぐわかるのである。繪の具の科學的成分を知らないでも畫の大家になつて居る人も澤山ある。これは今日の植物學者、鑛物學者、化學者が對象として居るやうな智識すらないのであるが、植木屋、彫刻家、畫家の必要とする智識は持つて居るのである。植木屋風の植

物學彫刻家風の鑛物學、畫家の繪の具學と云ふものはあるのである。例へば植木屋が松を移し植ゑた時には根を踏み締めて堅くするとよいとか、水はなるべく吳れないがよいとか云ふことを知つて居る。これ等は植物を育てる方の智識で、植物を煎じたり燒いたりする智識でないのである。丁度子供にもこういふ氣味合があると思ふ。子供を單なる知識の對象、科學的研究の對象と見るばかりでなしに、これを導き、これを育てるために必要な知識として、何等科學的素養なしに素人風に經驗的に覺り得た知識で、かなり立派な成績を擧げると同じ樣に、敎育者、父母、兄姉等も子供を育てる上、養ふ上に就て、丁度審美的の觀察、審美的の研究が必要であらうと思ふ。

五、審美的究研の要訣

それには我々は知識を豐富にせんとするのみならず、寧ろ自分等の子供の時の心持、その感情、慾望等をよく思ひ起し、又今日でも常に子供の側に立つて、子供の身の上となつて、充分の同情をこれに寄せ、その上で判斷をすると云ふことが必要である。一體科學的觀察とか、實驗とか云つても、その實驗の結果を判斷する時は、いつも自分に省みて所謂自省法と云ふものと調和して、始めてほんとうの理法が出てくるわけのものである。純粹客觀的のものでは決してないのである。それが素人風の情で觀る方法、直覺的に心を讀んで行く方法、情的觀察の方法になつてくると、一層我身を抓つて人の痛さを知ると云ふ要素が殖えてくるので、一言で言へば慈眼を以て、愛を以て觀て行くのである。處が心なき親、同情なき敎師は稍もすると自分等の子供時代と云ふものを忘れてしまつて勝手な、自分に都合のよいやうなことばかりを覺えて居るものである。自分の過去のつまらなかつた事、しくじつた樣なことは忘れて、得意であつた、一寸人に聞かせて自慢でも出來るやうなことばかり覺えて居つて、自分が小さい時

はお辨當の叱言などは一遍も云つたことはないとか、絹の着物などは一度も着たことはなかつたと云ふが、併し子供の時は、おいしいお菜があつた時非常に嬉しかつたとか、よい着物を着せられた時に雀躍をして、まづい着物を着てお友達の中に入つた時、涙ぐんだことがあるとか云ふことは忘れてしまつて、自分が年をとつてからそんな境界を超脱してしまつてから、自分の都合のよい樣なことばかり云つて冷酷に子供を觀ると云ふことが、稍もすると起るやうである。お婆さんが嫁などに對して、自分が一生の間に茶碗一つ壞したことがない樣なことを云つて居る、やはり正直な處は、いくつも壞したに相違はないのである。畢竟人を導くとか、育てるとか云ふ時に、只智一方で論理で行かうとするのは普通の人の稍もすれば陷る弊であるが、ほんとの生きた敎師、ほんとに感化力のある親と云ふものは、先づ情で觀、同情の涙から溢れてくる敎訓に由つて、始めて子供を發奮させるものであると思ふ。それで畢竟觀察の唯理的方面と共に、同情的方面を尊重せられんことを希望した次第である。（談文責在記者）

國民祭

（フレーベル會二月例會に於ける講演）

東京女子高等師範學校敎授　文學士　垣内松三

一

我々は上代文化の研究上原始的民族の言語文學美術等と、子供のそれ等との發達を比照して、研究の資料とするのを常とする。これはいづれも、

多少似たところがあるからである。尤も今日は國民祭といふ社會的方面についてお話をしたいと思ふのであるが、若し心理的方面から見て、兒童研究の方面にも多少の參考となれば、誠に幸である。尙ほもう一つ申上げて置きたいのは、本年諒闇に當つて我々は、多くの祭日を經驗したが、これまでの祭日の記憶と對照して淋しみを感じた。そしてこの祭日は只あたりまへの日と同じに夜があけて日が暮れたまでゞあつた。して見ると、卽ち祭日といふものゝ氣分は心理的のものであつて、この氣分は「日」を遊離して考へ得らるゝものであるといふ經驗を得た。今日はこの祭日の氣分を捉へて提出しようとするのであるが、それと共に國民一般にわたつて居る氣分は國民敎育上如何なる意味を有するものであるか、またその中に於ける子供には、どんな感じを與ふるものであるか、こういふ問題を考へて見たいと思つて、この題を揭けたのである。一體國民的亭樂といふ術語は、獨逸の文獻學では前から用ゐたが、我が國從來の學者は之れを、年中行事といつた。但し月々の祭に就てその一々の起源沿革を考證するのみで、科學的には研究されて居ない。たゞこれを分類して、朝廷柳營、民間の年中行事の三種として、この一部々々に就て研究を試みて居たが、併し實はこのやうな三種の別をなし得可きものではなく、ある祭はこの三階級に渡つて行はれて居るのもあり、又その一部にだけ痕跡を殘して他は消滅したのもある。卽ちともかくも國民心理の間に生き得たものだけが、生き殘つて後にまで行はれたのであるから、自分はその意味で、自分の學問系統に於て、此くの如き文化の一表現を引くるめて、『國民祭』といふ名を附して居る。

國民祭の話をするには、祭の起源、發達、傳播に分つのが自然の順序である。まづその起原から始める。

祭の起原は各民族によつて同じくない。同じく

ないのは大抵その住んで居る自然卽ち、山、海、野原等の影響や、またその民族の作つて居る特殊の社會組織によるのである。然し、その原因はどうあつても、祭は年々行はれるにつれて、次第に嚴肅莊重を加へて遂に『國民祭』となり、またそれと共に他の一面には、遊戲娛樂の氣分が漸次發達するのが常である。

日本の國民祭は、大體に於て家の祭であるといふ特色を帶びて居る。家の祭といふものが起る必要條件は家の族員の團結といふことである。而して此の團結のもと丶なるものは火の發明である。日本に於ても火は、始めは世界の古い民族のするやうに鑽つてつくつたのであつた。火が出來てから今まで生食をしてをつたものが、煮る燒く蒸すといふ樣になつて、料理法が一變してこゝに於て一定の食物を調理してそれを同時にたべるといふ事が始まつた。而して、食時の定つたことが人間の生活に、勞働の時間と、休息の時間とを鮮明にする原因になる。古い文獻に朝餉、夕餉といふ語があるのを見ると、朝夕二度の食時が明らかに定まつて居たのである。卽ち朝の食事の前後、夕食の前後によつて、勞働と休息との區別が出來たと思はれる。ともかく今までは、日の出入、月の盈虧で時間を計つて居たのが、それよりも、食時によつて、もつと明かに人生に時間の觀念がおこるもと丶なるのである。

朝の食事に於て第一にするのは朝まつりごとであつた。又日本の上代の民族は農業と狩獵とに從事して居つたと思はれるので、晝は山野で勞働して、夜は歸つて休む。この夜の食事に、また多くの祭が行はれる。夜は朝の祭政とは違ひ、餘興が伴ふ。又この時に家の老人が子供に昔の事を話してきかせる。彼の今日に殘つて居る神話傳說などは、この子供に對する老人の話がもとであると思ふ。これは外國でも同じであつて、かくして童話や、お伽噺が出來てくるのである。又此の時に簡

單な音樂、舞踏も始まるのである。一體日本の祭や儀式には夜行はれるものが多いが、これは國民の文化を調べるうへに逸してはならぬ大なる資料となる。而して朝一定の祭をして神に祈願し、夕に祝福を感謝する一日の祭が時代を經るに從つて毎朝夕ではなくて、旬になり、朔になり、節になつて茲に『祭の暦』なるものが出來るやうになつたのである。

祭の暦の出來る原因は、人事に伴ふ結果であるが、もつと有力な原因は自然の影響である。日本人は農業の民で收蓄の民とは異り、多く野外に晝出てゞ働き、夜は外に出でずして內に居る。從つて既に人も知つてる通り星、月などは日本の神話文學には出ない。而して祭に於て、農業に關した一定の季節の影響が著るしく現はれて居る。卽ち播種、收穫の二大時期の影響であつて、この季節が中心になつて祭の暦が出來る。これに就て少しく「年」といふ言葉の解釋をいふ必要があるが、本居宣長翁は年といふのは種を植ゑてからとり入れるまでの間をいふのであると、謂つて居る。語形の解釋は誤つて居ると思ふが意味はこれで大體よいと思ふが、さうすると一年の間に時間の空虛が出來る。これについて此頃外國人の中に一年を三百六十五日といふのは支那の暦であつて、日本の上代では一年を三百六十五日とは思はなかつたのであらう、歷史に錄してある天皇の寶算から研究しても、仁德天皇以前は一年を三百六十五日とせず今の一年を二年としてをつたので卽ち春分から秋分まで一年、秋分の次の春分まで一年として居たのではないかといふ說も出て居る。歷史家の方からも、古くから干支が十運り位違ふといつて居るのとよく合つて居る。もしこの說が當つて居るとすると宣長翁の說よりも一層明瞭になる。さうすると大體種まきからとり入れまでを一年、とり入れから種まきまでを一年としたやうにも解せられる。ともかく農業國であるので祭の中では、

種まきが一年の始めの方の最も重な祭の一日、收穫の時が終の方の主なるものであつて、この二大時期を中心とした祭が行はれて居る。かういふ風にして一年中に一定の祭の時が出來た。これが祭の暦の土臺となるのである。

斯くて一方に先づ春祭りといふ日本中に今も廣く行はれる祭の風が起る。行事には種々あつて種子を下ろす時に色々神に今年の豐作を祈る。又それに餘興が加はる。彼の三四月を通じて各地に行はれる希望と、觀喜にみちた賑やかな春の祭は、この祭の暦の始めの部分に總括せられ得るのである。新年に類似したものも、古社又は民間に行はれて居る。次に春祭の終る頃から今年は豐饒だろうか、どうであろうかといふ事が心配になつて、それを神意を聞くのが原因となつて、こゝに一團の祭が起る。この神意を聞く方法は卽ち彼の占である。その中で特色のあるものを例にいへば、たとへば大綱をつくつて兩方から光をひいて勝つた方の村が豐年だとする。これは大分廣く行はれた。又石打などいふものもあつた。石をうちあつて勝ちしものが實るといふのである。又喧嘩祭といふのもあつて、あらゆる力を出して喧嘩をして、勝つた方がよく實るといふ。又農業のみの方ではないが初午の祭も一般に行はれてこの時にも團子を拾ひ合つたり。叺を引つ張り合つたりして色々力で以て占をすることが一般の祭のもとゝなつてをるのがある。又力のみでなくある地方では粥占といふのが行はれる。粥の中に竹の筒を入れて筒の中に入つた小豆の數で豐凶を占ふのである。又熱田の鳥の神事、伊勢の柏流しなども占の一種で之れ等の原因から國民祭の一種が生して居る。また探湯といふのは惡い汚れがある時は今年の實りがわるいと神罰の意を含んで居るもので、今迄述べた占とは少し種類が違ふが、矢張り國民祭の一部として殘つて居る。尙ほ一つ惡戯に類した占の法がある。伊勢の山田の「ツト入り」などは之れであつ

て、變裝をして何處の家へでもツト入つて自分の好きなものを見るといふやうな風。又早く禁せられたが以前正月に行はれた水打、粥杖の風習その他之れに類したるものが地方には痕跡を存するものが多い。これは一見惡戯の樣であるが、實は祝の意を含んで居るのである。また削掛の神事といふのも處々に行はれるが、祇園で行はれるのは大晦日の晩に火を消して參詣し惡口の言ひ合ひをして一年の穢氣を拂ふ。言ひまけた者は一年中不幸であるといふ。かういふ類のものは今日では只奇らしい風習として殘つて居るのみのものがある。今日獨遊にも大晦日の晩に鐘がなると町へ出てゆき、人のシルクハットを叩き破る樣な事がある。之れ等のもとを考へて見ると、つまり吉凶禍福を占ふのであつて、斯ういふ原因から生じた上代の信仰がもとゝなつて、國民祭として廣く行はれて居るものが澤山ある。

また茲につけ加へて置かなければならないが、神に祈る爲めに供物、祝祠などが必要である處から、此の供物の風習だけが今日に殘つて色々の國民祭が起つて居るのがある。日本の風では供物には醴、鰭の廣物、はたの狹物、毛のあらもの、毛のにごもの、甘菜、辛菜などを供へる。またこんなきまりきつたものばかりでなく、各地に國民の風習として見るべきものもある。上諏訪地方では蛙を獻げる。また鹿の頭(その數が妙に七十五になるといふことである)も獻げる。猪も獻げる。今は禁せられたが牛を獻げた地方もあつた。或は動物ばかりでなく人間を獻げるのがある。ある神社では旅人を捕へて獻げる神事もあつた。またある神社では大俎に人をのせ(その人は抽籤によつて定める)庖丁をあてる眞似をしたのもあつた。また鬼の出る祭もあるが、之れ等は所謂犧牲かどうか議論のあることで、こゝでは之れは避ける。ともかくもかういふ樣に供物の特殊の風習が奇らしい祭となつて行はれて居るのである。

春は今年の豐作を祈り年中の幸福を願ふためにいろ〳〵の供物を獻げ祝詞を奉るのであるが、秋は感謝の祭で此の秋の時には豐かな滿足の歡喜の氣が溢れるて祭の式の後には餘興が盛に行はれる。春祭の後夏の間いろ〳〵苦心した穀物が稔つた喜びで之も一つに神の賜として大に祭り祝ふ。卽ち之れは秋の祭であつて、地方によつては春よりも賑やかであつて、日本中に喜びの聲が滿ちる。花車も出す。舞樂なども出る。里神樂もある。ともかく秋の祭といふ豐かな一團の國民祭が生ずるのである。

祭の暦によると大體春の祭と秋の祭とが中心になつて、此の間にあるは祈願或は感謝の性質のものである。これから國民祭が多く出來るのである。

三

以上は四季折々のうつりかわりから見た祭の起源の一面であるが、尙ほ朝祭に祈る家族の幸福といふことが、四季は行はれる祭の原因となつて居る。その著しいものは民間信仰、民間療法といふやうな心の働きから出て居る。先づ一例を擧げると之れは食物に關するもので、或る季節に於て其の時のものを食べる時は邪氣を攘ふといふやうなことである。又一方には住家の禍を拂ふが爲めである。かういふ點から特に家の祭が多く出來る。而して其の動機が私の身上に關したことであで此の方から家々の祭が出來て居る。その種類はるのいろ〳〵あるが、食物と住居とに關するものをひつくるめて言ふと正月の齒がため、屠蘇白散は一般に行はれて居る。七草なども廣く行はれてある。二月の二日灸、これは食物ではないが德川時代に行はれた。また初午の時に山の芋を賣るところもある。また繪馬を買つて家の中に置けば年中幸があり殊に養蠶によいといふ風も廣くある。三月には雛まつり、上巳の風が雛遊びとうつり變つたので、桃の花、草餅、菱餅、白酒等をそなへ、德川時代より特に女の子の遊戯となつて主

な家の祭となつた。五月には菖蒲酒、菖蒲湯がある。葵祭の祭は雷よけである。又惡疫よけである。その外新綠の祭は活躍の祭である。競馬がある。菖蒲打ちがある。皆生氣に滿ちて居る。この季が過ぎると、六月には六月跋があるが、之れは夏の眞盛故その時の惡氣を拂ふのである。宮中では忌火の御ものを召し上る。民間にも暑氣惡氣攘ひに基いた祭が所在に行はれる。

七月には七夕がある。冷素麵、餅などを食した風もあつた。九月には菊酒、草餅。十月には亥の子餅。十二月には追難の儀式がある。一時衰へたがこれも廣く行はれたものである。冬至にもいろいろの風が行はれる。十二月には御忌火の食事を召す禁中の御儀式は六月と同じである。卽ち食物住居の內から其季節にあるものを以て健康を祈り望む事が國民祭の主な原因をなして居るのである。此の外附け加へていふと、涅槃の時にあられ、いりまめ。灌佛には朝早く寺へ甘茶をもらひに行く。また家の前に長い竿を立てゝそれに躑躅や石楠花などをさして佛に獻げる。之れ等の風は極く美はしいと思ふ。孔子はむつかしいおぢさんと思はれたか孔子の方には、こういふ御馳走はない。尤も宮中には二月に孔子の祭があり儒敎が盛になつてから士人の間に行はれたが民間にはない。斯く、食物や花などを獻げ二民の感情を表はす。これが祭の一起原をなして居るのである。四季折々にその家々に行はれる此の種の祭が忙しい冷い人生に豐かな趣ある感じを附け加へることは、その國民でなければ分らぬ味である。

四

以上大體國民祭の起源を述べたが、之れ等の國民祭の大部分が此の後幾多の變遷を經て、遂に德川時代に五節句となり、また明治初年に之れが廢せられ、今日では國祭日として定まつた公の祭日が出來たが、それでも尙ほ民間では、昔のまゝのいろ〳〵の祭が殘つて行はれて居る。その發

達の跡を見るに日本固有のものと、外國の風の入つたもの、或は外國の思想をとつて日本のと調和したもの等がある。ともかく縱に長い間自然の影響に基いて發達したものが横に外國の影響によつて彩られて、いろ〳〵の國民祭が出來て居る。又其の中のある祭は早く消滅したのもあり。あるものは廣く傳播して國民的となつたものもある。之れは皆國民の心のはたらきである故に、國民祭の發達傳播を見ることによつて國民性を見ることが出來る。卽ち話の順序としては、玆に進んで發達傳播に就いて考へなければならぬのであるが、その時間をもたぬのは甚だ遺憾である。ともかく斯ういふ祭の風、かういふ氣分の中に我々は育つて居る。一年を十二ヶ月に分つといふのはよそゆき月の數で、實はおはぎの月お團子の月だのと覺えて居る。我々が異鄕にあつて故鄕の事などを想ひ起すのは先づ第一にお正月である。お祭りの時である。これは自分一個の考へかは知らないが子供の一年の感じといふものは、かやうにして頭に入れられるので、子供の歷史は斯くて年より年にと移りゆくのである。もしかういふ空氣の中に子供が育つとすれば、之等の祭を子供の爲めによい祭にして行ふ樣に考へなければならん。英國のことわざにも餘り嚴しくする子供は鈍くなるといふことがあるが之れは考へべきことである。德川時代に行はれた雛まつりは女兒の爲めで、端午の節句は男兒のとしてあつて今は表向きではないが家の祭として行はれて居る。全體子供の考は祭政一致である。遊ぶのがその半分の主な仕事である。斯ういふ遊びの日を子供の爲めを趣深いものにしてやることは極めて大切であると思ふ。年の始の正月の祭は國民一般の心に强くしみて居る。諒闇今年のさびしさを以つて見ても年の祭の氣分といふものを考へる事が出來る。三月の桃の祭。四月の花の祭。五月の新緣の祭。秋の菊の祭、これは明治節と一緒にすることが出來る。人爲では出來

るものでないが自然に感じが調和して居る。冬の祭は雪の中にとじこめられ、風が寒いので、家の内の祭が多い。此の季のクリスマスは子供を中心としてをる。サンタクロースなどもだん〳〵に外國の者でない日本風の翁になりかけて居る。次の時代には日本固有のものとなるのであらうと思ふ。更にこれを學年期にして見ると、第一學期には桃、櫻、新綠の祭、第二學期には菊の祭、第三學期は雪の祭である。かくて子供の生活に主なるものは遊戯である。如何に忙しい今の時代とはいへ人々が家の内に、子供の樂しみの爲にその忙しい時を割いて、子供を樂しませてやり度いと思ふ。また大人も働くといふ一面の外に一面には娯樂遊戯といふ事も大切であつて、忙しい劇しい働きの中に寛たりとした趣ある氣品がなければ大國民の襟度とはいはれまい。今日の社會、家庭が一體にかういふ類のことに冷淡であるのは甚だ殘念のことに思ふ。

今日はたゞ國民祭の起原に就てのお話をした。起源の中にも、子供の遊の心理的起源と同一のものが數々ある。獨その發達傳播に就て述ぶべきであるが、時を有しないのは遺憾である。此のお話が幸に兒童教育の方面に多少の參考ともならば最倖である。

一面に世の中が忙しくなればなるほど他の一面に靜な趣ある時間を渇望するものである。外國の友人などに比べてどうも日本の友人は激しく働らかない。だらしがない。これでは國民祭もだらしがない。併し子供には遊びが仕事である。露西亞の友人が日本の家庭には鞭がないと私に申しましたが鞭の願があると同時に、面白い遊びも工夫してやりたい。かういふ氣分の中から次代の國民が知らず〳〵の間に薫育されるのであると思ふと、決して閑人の閑事業ではない。

（文責在記者）

少女「エピー」（續）

――エリオットの傑作「サイラス・マーナー」中の可憐の少女――

東京女子高等師範學校教授　岡田　みつ

獨身者の「サイラス」が二歳の幼兒を抱へて如何するだらうと、世話好きのお神さんや、無精の母親達は興がつて噂をしてゐる中に、「ドリー」といふ世話好きのお神さんが、自分の子供のさつぱりした着古しの衣服を持つて來て、「サイラス」に渡しながら、「これからチョッ〳〵と暇を盗んで世話を爲に來て上げませうよ」と云へば、「サイラス」は「有り難う〳〵。だが唯敎へてさへ下れば澤山だ。私は自分で何でもやりたい。此の子が私でなく他の人を好きになると困るから。私は家内の事を一人でやりつけて居るから……習へば何でも覺えられる」と答へた。「大きにさうとも其で衣服は之を一番下へ着せるので次が之」と「ドリー」が敎へるのを、「サイラス」は近眼の顏を差し寄せて見て居た。すると、幼兒は兩腕で「サイラス」の頭を抱へて、クウ〳〵言ひながら彼の顏に唇を押し當てた。「ソレ此子はあなたが一番好きだ！あなたの膝の上に載せて欲しいのでせう。それお抱きなさい。而して着物を着せて御覽。さうすれば初から一切あなたが世話をしたと言ふものだ」と云はれて、「サイラス」は何とも言ひやうのない感に打たれて、身を慄はせながら膝に子供を載せて、着物を被せてやつた。それから又「ドリー」が「その子供は敎會へ連れていつて、命名式をしてもらはなければなるまい」と言ふと、「サイラス」は彼の故郷の敎會では左樣の式を全くしないので顏の

色を變へて驚いた。……が斷乎と「イこャの子の爲には何でもする。此土地で良いとなつてゐる事は、何でもする」と云ひ切つた。それで此幼兒も型の如く洗禮をうけて、「サイラス」の母の名を取つて「エピー」となつた。

一月經ち二月經つ程に、「エピー」は孤立せる「サイラス」と、世間との間の連鎖となつて來た。黄金と子供と！何といふ相違だらう！黄金は何の注文もしないが、日光を厭ふて、鳥の影にも人の聲にも耳を貸さない。「エピー」は始終いろ〳〵の要求をして、光と音と活動を愛して、何にでも手を出し、何にでも信頼した。黄金は「サイラス」の考を一定の圈内より脱せしめなかつたが、「エピー」は變化の好きな、欲望のある人の子であるから、「サイラス」の考も、勢ひ、進行して將來の事に思ひ及ぶやうになつた。黄金は「サイラス」を一時も永く機臺に居て、機の音の外に耳を傾けるなと命じたが、「エピー」は機臺から彼を下ろして稼ぎをせぬ時間を休息の時間と思へと教へた。春日を受けてブンブンいふ蠅さへも、「エピー」が珍しがるので、「サイラス」も物珍らしく懐かしくさへ思つた。

日影長く、金ぽうげの花が野邊に充ちるやうになると、「サイラス」は帽子も被らずに「エピー」を抱いて野の草の上に坐つた。「エピー」は花を摘むとて、ヨロ〳〵歩きまはつて、飛んでゐる蝶に物を言つたり、花を持つて來ては父ちやん〳〵と見せたりした。偶然鳥の聲が耳に入ると、「サイラス」は靜かにと手眞似で制して、「エピー」と二人でその聲を待つてゐた。やがてその聲が聞こえると、「エピー」は得意にアハ、、、、と高く笑つた。かくて「エピー」の智惠が付くに連れて、「サイラス」の古い記憶は喚起せられ、「エピー」の心が伸びるに從つて、彼の心の冷かに凍つてゐたのが緩んで解けて來た。

「エピー」が滿三歳になつた頃には惡戯を覺えて

なか〳〵世話を燒かせるやうになつた。「サイラス」は一通りならず骨が折れて、途方に暮れることもあつたが、可愛いさが先に立つて、どうとも處置がつかなかつた。すると例の「ドリー」が來て、「少しは恐い思ひもさせなくては、子供の爲にならぬから、一度石炭部室へ入れるとか、打擲するとかして御覽なさい。さもないと我儘が募つて姑末がつかなくなる」と注意した。尤だとは信じながらも、「サイラス」は此二の方法には、自分の氣が先づ弱つた。「エピー」に苦痛を與へるのが辛いばかりでなく、萬一「エピー」が彼を愛する量が減りはせぬかとの懸念で。

「サイラス」は忙しい時は、巾廣の長い布で機臺に「エピー」を結ひ付けて置くのが例であつたが、或夏の朝、彼は込み入つた仕事に取り掛つて、切りに鋏を使つてゐた。さて此鋏といふものが、「ドリー」の注意で「エピー」の手に觸れぬやうにしてあつたのだが、そのカッチリと齒の合ふ音、が「エピー」には何ともいへず面白く思はれるので今其鋏が、自分の手の屆くところにあるのを見るや、「エピー」は小鼠の如くに、音も立てずに寄つて來て、鋏を手にして、以前の坐に戻つた。しかも蔽ひ隱す身振りで「サイラス」に背を向けて坐つた。而して、自分を結び付けてある布を、ザク〳〵ながらも眞二つに切り放して、戸外へと拔け出ていつて仕舞つた。何も氣付かぬ「サイラス」は、「エピー」がいつになく大人しいなと思つてゐた。

暫時して「サイラス」は鋏が入用になつて、初めて此大變事を知り、もしや近くの石坑へでも落ちはせぬかと、其儘去り出て「エピー」や「エピー」やと呼び立てた。あたりを隈なく見渡してもその影さへ見えないので、冷汗が額から雫と落ちて來た。何時拔け出したのだろう？……僥倖にも常に行くあの草原へ、いつてゐて呉れゝばよいが！其草原は草が高く生ひ伸びて居て、一寸見た位で

は見付けやうもなかつた。「サイラス」は其から其と草を分けて覗き歩いて、終に隣りの野へ出た。其先には水の淺い池があつて、岸には軟い泥が廣く縁をとつてゐた。と見ると、「エビー」は其の池の端で、自分の靴をバケツにして、深い馬の足跡へ水を酌み込んでゐた。而して自分は片足素足で暗綠色の泥の中に平氣で立つてゐた。傍には子牛が一疋、垣越しにびつくりしたやうに「エビー」の仕草を眺めて居た。

「サイラス」は何よりも、祕藏の寶が見付かつた嬉しさに、急ぎ抱き上げて頰ずりをしながら、うちへ連れて歸つた。さて戻つて來て、洗つてやる段になつて、始めて「エビー」を懲らせなくてはとの事に思い至つた。「エビー」が又脫け出して、怪我でもしてはと思ふと、常になく氣も强くなつて、一つ炭石部室へと考へた。「惡い子だ〳〵！鋏で切つたり、逃げたりして！いけない子だからこの中へ入つて御出で」といつて見た。「エビー」が驚いて泣くかと思つて居るのに、さも珍らしい趣向だとでも思ふらしく、「サイラス」の膝の上で跳ねて居た。併し兎も角も石炭部室へ入れて、戸を閉めた。暫時すると「此處明け〳〵」と幼い聲がするので、「サイラス」は忽ちに出してやつた。而して、用事もそつちのけにして、「エビー」を洗つたり衣を更へさせたりして、「もう今朝は布で結ひ付けて置かないでもよかろう」と思つて、振り向くと「エビー」はいつか再び石炭部室に入つて居て、其處から眞黑の顏と手を出して、「エビー石炭部室にゐるの」と云つた！「サイラス」は罰を加へることの無効なのを悟つて、「ドリー」に向つて「面白い遊びだと思つて居るのだから仕樣がない。さればといつて痛い目をさせるのは厭だから、少し位惡戲をしても我慢しやう。其内には成人して仕舞ふ」といつた。それで「エビー」は辛抱といふ柔かい毛で裏を付けた暖い巢の中で育てられて、この子には世の中に、恐いものも氣に逆らふもの

も無かつた。

「サイラス」は、注文の糸や織り物と「エビー」と双方を背負つて歩くのは難儀だつたが、一寸の間も「エビー」を「ドリー」の手に委ねたくなくて、何處へでも連れて出た。すると織り屋の子供〳〵ッて家々で持囃して呉れた。「サイラス」一人の頃は、妙な會體の分らぬ人だと皆思ふので、なるたけ口數を少しきいて、早く用を濟ませたが、「エビー」と二人來るやうに成つてからは、皆が笑顔で迎へて、あれこれ樣子を尋ねるから、「サイラス」も一寸腰でも下ろして、子供の話をするといふ工合で、「痲疹が輕くすむといゝネ」とか「獨身者でゐて其樣な子供を引受けやうといふ人は滅多にない。御前さんは、機を織るから女見たやうに器用なのだろう」といふものもあれば、旦那や內儀は「エビー」の手首を觸つて「なか〳〵固肥りだ。うまく育つて丈夫な娘になれば、年寄つた時どんなに手助になるか知れない」と云つたりした。下女達は「エビー」を抱いて鷄や雛ッ子を見せたり、櫻ン棒を振り落して呉れたりするし、子供はソロリ〳〵と歩み寄つてジッと「エビー」を見詰めて、急に頰ずりをしたりした。「エビー」が一所の時は、誰も「サイラス」を厭がらないから此子が「サイラス」と世間との繋ぎになつたので卽ち「サイラス」が「エビー」を好くと、「エビー」は世の中のものを皆好きだから、「サイラス」も、亦、其れが好きになるといふ順に成つて來たのである。

「サイラス」は、「ラブロー」村の生活を「エビー」の立て場から觀察し始めた。「ラブロー」で善いといふ事は、「エビー」に持たせたり爲せたいので、十五年間一瞥もくれなかつた村の事に、耳を傾けて聽いた。金を溜めやうとの一心も、たまつた金が紛失したと同時に消滅して仕舞つた。且又金の無くなつた時の歎きが深くて、新たの金に觸れても、元の嬉しさを覺える事もなかつた。それに今は、金

に代はる子供が出來たので金を稼ぎ出す目的が生じて、金其もの以外に彼の心は誘ひ出されたのである。昔は天使が天降つて、手づから人の手を取つて、滅亡の市から人を救ひ出した。今の世には白い翼の天使はないが、尙人を滅亡の域から導き出すものがある。しかもその手を延べて呉れるものは、子供である事がある。

＊　＊　＊　＊　＊

其より十六年を經過したある秋の日曜に、敎會から出て來た「サイラス」は、六十の聲も聞かぬに、肩が丸くて髮の白くなつた一老翁であつた。「エビー」は十八才の色白の笑窪のある乙女で、縮れた美しい髮の毛は、帽子の外まであふれ出てゐた。人通りの稀な處へ差しかゝつた時に、「エビー」は

「御父さん嬉しくて仕方がない！欲しい〳〵と云つてゐた庭が出來るのですから、もう他に望みはありません。「アーロン」（ドリーの倅）が作らへてやると云ひましたよ。きつとさういふだろうとは思つたけれど」と云ひながら、父親の腕に縋つたり、小踊りしたりして歩いてゐた。

「なか〳〵狡猾な……「アーロン」が來たらば御愛想をよくして有り難がらなくては」と「サイラス」は滿面に、老人の落付いた嬉しさを堪へて答へた。

「そんな事をしないでもいゝの！「アーロン」は其がしたいのですもの」と笑つて「エビー」は又跳ねてゐた。

「サー〳〵その本を御出し。そう飛び跳ねては落としてしまふ」

などゝ話しながら、門口に來ると、ワン〳〵吠聲を立てゝ待ちかねた犬が、周章しく出迎へて、それから子猫を目懸けて飛び付いていつて又戻つて來た。而して母猫は、窓で日向ボッコをしながら眠さうな目で四方を見廻して居た。「サイラス」の小家に手飼の犬猫が增したばかりか、室内にも相

當の家具が出來て、光つて奇麗になつてゐた。

「サイラス」は「エピー」が膳立てをするのを見守つてゐたが、いよ〳〵食事となつては、あんまり口數をきかないでサツサと箸をおいて、エピーが自分の食事をそつち除けにして、犬や猫に戯つてゐるのを眺めてゐた。實際誰でも見とれる景色で、「エピー」の波打つてゐる黄金の髪は光るばかりに照り映えて、ふつくりした腭から頰は紅色の衣裳で、すつきりと尙際立つて白く見えた。而してその肩に子猫がかじり付いてゐると、犬と母猫は左右から「エピー」が態と遠くへやつてゐる肉を手を伸して取りたがつてゐた。

* * * * *

かくて後。偶然の事から「サイラス」の金を盜んだ賊が、彼の小家の近くの石坑の中に、溺死してゐた事が知れて、「サイラス」の金は、囊のまゝ再び彼の手に戻つた。之と同時に、「エピー」の眞の父親である豪家の主人は、惡事が人力を以て隱し了へるものでないと悟つて、「サイラス」の宿に來て、「エピー」が實子である事を白狀し、無造作に「サイラス」の手から娘を取り返へさうとした。

「サイラス」は、再び手中の寶を奪はれさうになつた。彼は其人に答へて「何故其ならば、さうと十六年前に私が此子を可愛いと思はぬうちに、御出なさらなかつた。今となつて娘で御座ると仰るのは、私の身から、私の心を刳ぐり取りなさるといふものです。貴君が此子を捨てなすつたから、神樣が私に下すつたので、貴君に何で親の權利がありませう！幸を授かつても受取らないで置けば拾ふた人のものとなるのです」と息卷いたが、さて我を張つて若しも愛子の出世の妨となつてはと、無念を無理に抑へて「イヤ何も申しますまい！御氣任せになされて、此子に直に御話し下さい。私は妨げは致しませぬ」と聲をふるはせていつた。

さて此場の樣を見てゐた「エピー」は如何したかといふに、「サイラス」の手を固く握つて親だと

いふ人に、斷乎と「ありがたう存します。分に過ぎた仰せで、御志は忝く存じますが、此父と別れましては、この世に樂しみも御座いませぬ。いくら榮耀を致しましても、父が家に只獨りで私の事を案じてゐると思ひますと、嬉しくも御座いません。此年頃父と二人で、毎日〳〵幸福で御座いましたものを、今更父と離れて樂しい事が御座いませうや。父は私が參る迄は、憂世に一人ボッチであつたとよく話しますが、今私がいつて仕舞へばやはり以前の一人になります。私の幼い時分から、可愛いがつて育てゝ呉れました父ですもの、私は一生傍にゐて孝行をするつもりで、父と私との間を誰にも裂かせる事では御座いません」と云ひ放つた。

「でも御前よく考へて御覽」と「サイラス」は小聲で注意して「欲しいものが、何でも買へる身分になれるのに、好き好んで貧乏人の間にゐて、麁末の衣服や食物に甘じやうとには、よく〳〵覺悟がいるから」といつた。すると、「エビー」は「御父さん私は後悔する事なんぞありません。馴れもしない良いものを身に着けたとて、身に添ひませぬよ。御洒落をして、馬車に乘つたッて、自分の好きな人と御付合も出來ないやうでは詰りません。よいものなんぞ何と思うものですか」と答へたので、生の親はすご〳〵立ち去るより外はなかつた。

「エビー」は直に庭作りの「アーロン」の妻となつた。「サイラス」と別居はせぬとの條件なので、「アーロン」は「サイラス」の小家に移り住んで、「エビー」のかねての願の花園を家の傍に裝置つて、親子睦じく世を過した。「サイラス」はこの世の中には邪の事もあるが、つまりは正しい事の方が多いといふ事を經驗して、あの若年の折の寃罪事件もその事自身はいまに暗黑であるが、彼の事からして自分に子供が授かるやうになつた事を考へて天道の是なるを、堅く信ずるやうになつた。（終）

玉ちやんの一年

大阪　芙蓉峯

世に事實ほど貴重にして且つ趣味深いものはないといふことは、此の一篇を讀むもの〻皆今更に感ずる處だと思ひます。愛すべき玉ちやんの風貌が、あり〳〵と目に見えて來ます。また、此の可憐なる幼兒のために與へられて居る眞卒なる同情と、細心なる注意との氣分が、誇張なく衒飾なき筆端から、吾々の胸へ淙々と漂ふて來ます。そして此の種の幼兒教育に就て、いろ〳〵のことを敎へます。勿論多數の保姆諸君の中には、此のたぐいの經驗は必ずしも非常に特別の場合でないかも知れません。併し事實の貴さは、それが大事實であるからとは限りません。事實はすべてありのまゝに貴いのであります。そして理屈よりも、議論よりも色々のことを考へさせるのであります（編者）

四月の六日に入園式をした玉ちやんは滿四年三ケ月で四十名の同年輩の男女兒と共に新入兒となつた。其母は發達の遲れて居る事を繰返し繰返し賴んだ。其原因としては腦病を患へたのでもなく、近親結婚の爲でも無い樣子。たゞ家が商業で多忙だら子守に任せて置いたとの事、其間に何か原因する所があつたのであろう。

四月八日。玉「あーいちやい、あーいちやい」保「あらどうなすつた、瘤が出てまあ痛いでしよ」友「玉ちやんね、ピアノに、ぶつかつたの」保「ピアノで」そーですか、玉ちやんは幼稚園のかつてが、まだ分りませんから、ピアノが見えなかつたのでしよ」、と云つたが、この大きなものが見えないとは、餘程遲れた兒だと思つた。それから幼稚園の中を連れて廻つて馴れさした。

四月十五日。友「先生玉ちやんがお池へ……早く來て頂戴」、今迄傍に居つたのにと思つて、馳けて行くと淺い池だから足許丈だが濡れて、ぼんやり立つて居る　保「玉ちやん冷たいでしよ着物を着かへて上げますよ」、と云つて、幼稚園のものと取り

替へた。それから日課の樣に毎日毎日園内をつれて巡つた。

五月二日。共同遊戯をした。他の幼兒は最早列をして歩く事に馴れ、ピアノの音で行進するが、玉ちやんはすぐ獨りで、ふら〳〵と横に出る。友「あら又玉ちやん、あんな所へ」保「それではね玉ちやん、一番先きにいらつしやい、そして先生とお手をつないで汽車のかまになりませう」と連れて來た。

五月七日。玉「汽車が通る煙を出して（唱歌の一節）……先生汽車が出來ます」。

保「玉ちやんはお歌が上手ね。おや〳〵板排べの汽車が出來ましたね。あら煙出しが下向きですね」。

友「玉ちやんの汽車は水に寫つた所ですか」、と少し發達のよき兒が尋ねた。保「そーでしよ」、と答へたが玉ちやんは何によらず轉倒して作るのが常であつた。先生は其時にいつも横型か實物かを觀察せしめるのをつとめて居た。

五月十七日。保「玉ちやん、オルガンが何を歌ふか聞いてゝごらんなさいよ」玉「はと」保「そーです。その次は」玉「君が代」保「それではね玉ちやん、お目をくゝつてお手の鳴る人を捕へてごらんなさい」友「玉ちやん〳〵ポン〳〵〳〵」玉ちやん立つた儘動かない。この聽覺練習見事失敗した。

五月二十一日。保「花ちやんも春ちやんも、玉ちやんを仲間に入れて遊んで頂戴」友甲「だつて先生玉ちやんと遊ぶと、つまらないんですもの」友乙「玉ちやんいらつしやい飯事しますから。あなた猫におなりなさい」。暫くして猫は捨てられて、ぼんやり空氣見物をして居る。保「玉ちやん、先生と砂屋事しませうね。玉ちやん買ひにいらつしやい〳〵」友甲「先生私も寄せて頂戴」。友乙「私も先生」保「玉ちやんにお頼みなさい」。友「玉ちやん寄せて頂戴」。

保「ぢやあね、これから、あなた方のお遊びにも玉ちやんを寄せて頂戴よ。」かくして玉ちやんの價値を少しづつ上げる。幼兒も「私、玉ちやん好き

よ」と云ふ樣になつて次第に友が出來た。

六月中旬。この頃から餘り物に突當る事がなく、外遊びも友に引廻され、入園當初に比べて餘程快活になつた。家庭の方からも食事のすゝむだ事、身體の壯健になつた事等について禮を云つて來た。こちらからも草履の注意だとか、表店の繁雜な所よりも祖父母の住んでる靜かな隱居家の方が爲によいとか二三の打合せをした。

六月下旬。玉ちやんの體格檢査をした。入園當初に比すると他はあまり差がなかつたが、胸圍と重量が著しく增した。

七月二日。身體の方は丹誠の効が有つたが精神の方はあまり以前と異なる所がない。入園後三ヶ月になるに自分の室も席も分らない。友「先生玉ちやんを連れて來ました」。保「はばかり樣。玉ちやん、お机に赤い紙を貼つて置きましたから探してご覽なさい」。玉「ここ」保「いいえ」。二三度迷つて漸く赤の見別がついた。それから餘り席を忘れる事がなくなつた。保姆はもつれた糸の端を見付けた樣に喜こんだ。

七月六日。赤を知つてから五日目に靑紙と取替へて試したが失敗に終つた。この後夏休み迄は氣候の爲か心身とも少しも進步を見なかつたが、しかし自分の室と席は間違へず確に理解が出來た。

九月一日。家庭へ注意した爲時々涼しい所へ連れて行つたと見え、元氣よく九月一日から來た。

友「玉ちやんねお部屋が分らないつて泣いてるわ」

保「あら、そうですか、玉ちやんここですよ」。嗚呼三十日の休み中に切角丹誠して緖を見出した敎育の手がゝりは元の有樣となつて居た。加ふるに口は締りなく開き、客貌さへも舊に復して居た。これを見た保姆の落膽は如何ばかりであろう。胸も迫まつて言葉も出ず。ただ顏打まもつて居つた。しかし又一方から考へると室が知れないとて泣くだけ感情の方が發達したのではあるまいかと、自ら慰めて、王ちやんを抱きしめた。

九月十九日。保「どなたか一人でお歌を歌つてご覽なさい」。玉「私歌ひます。鳩ポッポ」友「先生玉ちやんはお歌が上手ね」。實際不思議に唱歌のみは勝れて巧であつた。聲も清らかなれば拍子も正しく、歌詞も誤りが少ない。だから玉ちやんはこれで名譽を維持して居るのである。

九月二十四日。今日は玉ちやん石盤に何かしきりに畫いて居る。保「玉ちやん何が出來ました」

玉「山と花」と云ふが、其の實たゞ線ばかりで山にも花にも見えない。けれども本人は興に乘じて何か歌ひつゝ頻りに畫いて居たが、ふと見ると腰掛の下が變に濡れて來た。(便を外したのである)

保「玉ちやん一寸」と抱いて他の室へ行き着替させた。かゝる事は從來數回あつたのであるが、其日は非常に羞んで、しよげて居た。次第に感情的の方面が發達して來たので有ろうと愈々樂しみになつた。

十月三十日。玉ちやんは積木で遊んで居た。積んでは倒し排べては突き、玩んで居たが。玉「先生人形貸して頂戴」。保「取つていらつしやい」と云ひながら見て居つた。玉ちやんは、頻に人形を選つて居る。選擇の能力が出來たかと尙見て居ると、不規律に排べた木の上を人形に歩ませて居る。

保「玉ちやんそれは何ですか」。玉「はし」。保「其橋もよいけれど、水の流れる所がありませんからこんなにしてご覽なさい。そら水も流れるでしよ人形樣も渡りますね」と簡單な橋を敎へてやると、さも滿足した樣に、笑つて居つたが、友が外遊びに出てても玉ちやんは橋と人形とを玩んで居た。其後はいつも積木で遊べば橋と人形で少しも變化がない。これに對して保姆は多く他のことを敎へずたゞ興味の趣くままに少しづゝ指導して居た。

十一月十五日。玉「砂糖を買ひにいらつしやい〳〵。先生砂糖買つて頂戴」。保「よいお砂糖ですね。頂きませう。お直段おいくらです」。玉「三錢〳〵。」保「さー三錢お拂しますよ」と石を一つか

み渡すと變な顏をしたが暫くして三個の石を取つて殘りを保姆に返した。この時程意外に思つた事はない。他の幼兒と同じく感覺練習的の事や數に關した遊びを共にされて居つたが三錢で三個の石を取る程發達して居つた事に氣がつかなかつた。勿論三錢で三個に限つた事ではないが、とにかく玉ちやんは三と云ふ數を知つたのである。この頃から著しく精神が發達して來た。簡單な手技等はよく反復說明して知らすれば人手を貸らず作り上る事が出來た。但し他の幼兒に比べれば三倍の時間が必要である。

十二月三日。保「玉ちやんこの箱を皆さんに配つて下さい」。ふと用事を命じた。玉ちやんは、さも滿足したらしい笑を見せて、しきりに運んで居つた。無論完全に配れないが、先生の用事を手傳ふのを餘程名譽に思つたので有う。其からは又しても保姆の傍へ來て、御用させて頂戴と云つて、獵犬が主人の樣子を見る樣な容貌をして待つて居る。實は却て不便だが此の望みに輝く顏色に對しては種々の用事をさせずには置かれなかつた。これが爲に自然的に種々の方面の經驗を增して、非常に心身の發達を進めた、保姆は骨の折れない、しかも、彼れを充分滿足せしめて。好成績を得る良法を偶然見出したのを喜こんだ。

一月二十日。砂場の方で幼ない泣聲が聞えた。保姆が近づいて見ると玉ちやんは、二つ位の赤ん坊を、小さな手に抱へ上げ一生懸命の力を出して歩いて居る。否むしろ引きづゝて居る。玉「先生この人お母さん居ません」。泣いて居る幼兒は園兒ではない。どうやら外部から母の傍を離れて遊びに來たが興盡きて母を思ひ出して泣いて居るらしい。全體玉ちやんは、これ迄感情の方面にも餘程發達が遲いと思つて居たのに、斯く高尙な同情の萠を現はすとは案外であつた。保「玉ちやんは赤ちやんの泣いた時、どんなに思ひましたのですか」。玉ちやんは何も云はず只だ笑つて居る。保「可愛想

に思つたのですか」。玉ちやんはうなづいた。保「善い事をなさつたね。先生だつて可愛想に思ひましたよ」。用事を命ずる方法を執つてから先生に親しむ事が一通りでない。從つて先生も同感だと云ふ事は、彼の兒にとつて、千萬の賞言よりも嬉しそうであつた。

二月十二日。玉ちやんの父が來られた。其言によると家庭でも、心身の發達が次第に著しく見えて來た。そして先生を恭ふ事、先生の言動を眞似る事等、噴出しそうな事實迄を加へ話して其骨折りを謝した。保姆は其父に今迄自分のとつた教育の方法、卽なるべく精神に刺激を與へずに、氣長く習慣をつけた事、神經系統を特に養護した事、絕えず體格檢査を保姆自らした事、少し發達した所で感覺練習的の事をした事、又偶然に良方法を見出した事、度々失敗した事等を語り、其父に滿足せらるゝは金鵄勳章を拜した樣である事をつけ加へて、尙今後の打合せをして別れた。

小兒の傳染病

醫學士　石塚保吉

△傳染病とは何を指すか

傳染病といふのは、字が現す通り、うつる病氣であつて、その中に急性のものと、慢性のものとあります。急性の方は所謂流行病で、コレラ、チフス、猩紅熱等、却ち八大傳染病と云はれて居る類であります。慢性の方で最も有名なのは結核梅毒等であります。

△恐るべき黴菌

傳染病はどうして起るかといふと、御存じの通り黴菌の爲めに起るのでありまして、我々の肉眼

では見ることの出來ない、極めて小さい黴菌、及び原生動物といふ極めて小さい動物が原因となるのであります。この世の中にそういふものが普く存在して居つて、都合のよい機會が來ると人間の體中に入り、それ〴〵自分特有の病氣を起すのであります。二千倍位の顯微鏡で漸く見別けがつくかつかぬかといふ程に小さい。その黴菌の中にいろ〳〵種類があつて、それ〴〵形にも、大さにも違ひがあり、又種々のものに對する性質も異つて居ります。例へは或るものは酸素が好きであるし、或るものは酸素のある處では生活が出來ないといふやうなのであります。それで各々特別の名を持つて居つて、それ〴〵異る病氣を起します。例へばチフスの黴菌は人體に入つてチフスを起し、コレラの黴菌はコレラ、ペストの黴菌はペストといふやうに黴菌が異れば、それ〳〵異ふ病氣を起します。

勿論そういふ黴菌は、すべてが病氣の原因となるのではなく、中には有用に働くものがある、酒麥酒等を造るもとになる黴菌もあるのであります。斯ういふ黴菌の性質を一々述べることは煩はしくもあり、興味もない、又さほど必要のものでもありませんから略します、

△黴菌の住む場所と來る道

黴菌はどんな道を通つて人間の體に入るかといふに、種類に由つてそれ〳〵入りかたが違ひます。コレラ、チフス、赤痢等の黴菌は、食物と一所になつて口より入り、胃腸に達して病氣を起し、結核、インフルエンザ、ジフテリア等は空氣に混つて呼吸器から入り呼吸器病を惹き起し、ペスト、丹毒、產褥熱等は傷口から入り、梅毒、芥癬等は皮膚の表面に直接して病氣を起すのであります。

かゝる黴菌は何處に生活して居るかといふと、それ〳〵生活する場所が違ひます。破傷風の黴菌は土の中に生活し、結核の黴菌は結核患者の咳の中や、着物に附いて居り、チフス、コレラ等は患者の糞便と汚されたる場所又は物の中に潛んで居

るといふやうに場所は違ふが、至る所に生活して居るのであります。病氣の流行しない時は居ないのかと云ふと、そうではないので黴菌自身に都合が惡い時だがら沈默して居るといふまでゞ、矢張り汚れた着物や、水中土中に生活は保つて居るのであります。例へば冬の間沈默して居た黴菌が、夏になつて溫度が丁度よくなり、食物になるものが多くなつてくると非常に繁殖するのであります。それを人が食べると直ぐに病氣になります。黴菌は一旦自身の周圍が都合のよい狀況になると恐ろしい勢で繁殖します。例へば着物に一の黴菌がついて居た、それがどういふ加減かで人間の體の中に入ると、營養物はあり、溫度もよい程にあたゝかく、濕氣もあるから繁殖に極めて都合がよいのである。黴菌の種類により早く繁殖するものと、晩く繁殖するものとありますが、早いものはたゞ一個の黴菌が人間の體中に入ると十二時間に三十四億の多數になる。假に一個の黴菌の長さを一寸とすると實に七百七十里餘に上る譯であります。斯くの如きものに對しては非常の恐れを以て綿密なる注意により、その豫防の法を講じなくてはならないのであります。

△豫防法のいろ〳〵

恐るべき傳染病を防ぐには、その豫防法をとるのであるが、豫防法は黴菌の種類に由つて違ふ方法をとらねばなりません。前に申したやうに人間の體に入り方が違ふのでありますから、結核等には常に空氣を換へて清淨にするやうにし、その病氣のある人の傍に行かない樣にするとか、その病人のあつた家に、住まないやうにするとかであります。麻疹、インフルエンザ等の流行する時は電車其の他人込みの場所を避けるやうにし、コレラ、チフス等を防ぐには口に入るものは必ず煮たものでなければ用ひないことを嚴重に守るといふやうにすれば、決して病氣に罹る氣遣ひはない。又コレラやチフスは患者の大便から傳染するのである

から、そういふものに觸らないやうに、又それ等の汚物を洗つた疑のある水を使はないやうにすることが肝要であります。ペスト、丹毒等は手に傷をつけない樣にし、若し傷がついたらば、保護して置くのである。斯樣にして居れば先づ過は出來ないのであります。

△最も行はれ易い消毒法

我々は豫防法として以上の注意の外また黴菌の汚れたるもの又は其疑あるものゝ消毒法を行ひます。消毒法は卽ち外から黴菌が入らぬ樣にすること、黴菌が入つたならば繁殖しないうちに退治すること、此の二つを包括めて云ふのであります。卽ち防腐と制腐とであります。黴菌を殺す消毒法には種々の方法があります。藥物を以てするもの、蒸氣を使ふてするもの、日光に曝すもの、又熱氣消毒と云ふて空氣を熱くして黴菌を殺すもの、沸湯をかけ又は煮るもの等であります。黴菌は非常に小さいものでありますから、我々はいつも物を水で洗つて眼に見て奇麗なればそれが淸潔で、黴菌など居らぬ樣に思ふのでありますが、水で洗つても石鹼で洗つてもそれで消毒は決して出來ない、藥品を使ひ又は、日光や熱氣で殺菌をしてしまはなければ、眼で見てきれいだといふ丈では消毒にはなつて居らないのであります。

これ等の消毒法は、消毒する品物に由つてそれ〳〵の消毒法を用ひます、例へば手や身體は沸湯で煮ることも出來ず、辛抱して日光に曝して居ることも出來ませんから、石炭酸、リゾール、昇汞水等で消毒するのであります。着物等は簡單な方法では日光消毒が非常に確實に目的を達せられます、日が照うた時は十分か十五分で消毒が出來ます。手間もかゝらず、費用も要らず最もよい方法であります。食器等は湯で煮るのが最もよく、蒸氣や熱氣は我々がガーゼ等を消毒するに使ひます。患者の着物等は熱湯に浸けるのが最も簡單で地質も痛まないのであります。瓦斯消毒は普通の

人には出來ないのでありますから、以上の方法が普通行ふによろしいのであります。豫防に努め、消毒を嚴重にして常に病毒に接近しないやうに心掛けることが大切なのであります。

△學齡兒童に多いインフルエンザ

インフルエンザは急性傳染病の中の一つになつてゐます。今の處ではインフルエンザ菌が原因であるとされて居ります。流行性感冒と云ふ位非常に流行する病氣で、秋から冬にかけて殊に大流行をしますが、その間にもないことはありませんインフルエンザに罹る人は年齡に殆んど制限がなく、子供では比較的大きい方の子供、卽ち幼稚園時代から、學齡時代に多く、哺乳兒には多くありません。併しないことはないので、哺乳兒でも罹ることがあります。感冒と云ふと、誰れも呼吸器の病氣のやうに思ふので、我々がインフルエンザであると云ふと、それでも咳嗽が出ないがといふ人が多くあります。併しインフルエンザはそういふものでなく、無論呼吸器も冒しますが、胃腸を冒す場合があり、腦神經を冒す場合があります。卽ち氣管支性インフルエンザ、胃腸性インフルエンザ、神經性インフルエンザと三通りに區別することが出來ます。第一のは鼻が塞り咽喉がはれ、咳が出て熱が出るので。第二のはそういふ症候はなく吐氣を催し、食慾がなく、下痢をします。殊に小さい子供にそういふのが多くあります。咳嗽をしないから、普通の消化不良の如く見えるのでありますが、流行の時は無論インフルエンザと考へるのが至當であります。第三の神經性インフルエンザは頭痛、腰痛があり、全身が非常に弱つて時としては腦膜炎ではないかと思はれる場合もあります。又稀にはインフルエンザが原因になつて腦膜炎を起すこともあります。故に此の病氣は症候が極めて多く非常に厄介で、いろ〳〵の症候に現はれますから、流行でもないと診斷に難かしいのであります。斯ういふ種々の症候の外に高い熱

が何時も出ます。從つて頭痛がし、身體が痛むのです。咳嗽は出るのも出ないのもあるが。熱は續いて退かないで、一週間以上にも及ぶことがあります。か樣の場合にはチフスではないかと間違へられることがある。斯ういふ時は醫師の方ではチフスに特有の診斷法をすれば直に判明するのであります。それから咳嗽が頑固に出て、百日咳と間違へる場合があります。インフルエンザで麻疹のやうに發疹が出來ることがあります。併しそれは麻疹のやうに長くはなく、一時的で、一日位で退きます。此の病氣は斯くの如くうるさいが、恐ろしい病氣ではなく、一週間から三週間の中には癒ります、只恐ろしいのは餘病を起すことで、中耳炎等は殊に危險であります。黴菌が咽喉から侵入して中耳炎を起すので、それから誤つて腦に入ると腦膜炎になります。その外最も多いのは氣管支カタル、肺炎等であります。小さい子供がかふいふ病氣になると非常に危險であります。而してこれは空氣から傳染しますから、流行時には全く隔離する程にしたいものである。大抵は一家の中に一人患者が出來ると、殆んど防ぐことが出來ない有樣である。それ故風邪をひいたといふ人の處に寄りつかない樣にし、若し一家にその病人があるやうになつたら、出來ることならば隔離するのが最も安全であります。此の病氣は免疫は出來ないのみならず、一且罹ると寧ろ罹り易い素質を作つてしまひます。時には引いて結核を起す場合がある。併しこれは前から結核の素質ある人が、此の病氣に罹つた爲めに身體が弱つて、そのために結核が現はれるのであります。要するに子供にとつては注意して避けなければならないのであります。

○本會規則改正の議

本會規則に二三の改正を加へ度い議がありまして總會に於て御協議いたし度いと思ひます。就ては其の前全會員諸君に御同意を得て置き度いことがありまして、本誌會告に載せてあります。同會告は是非御讀み落しなき樣願ひます。

幼稚園の增設を望む

京都　藤田東洋（投）

一、

吾人は、幼稚園事業に關し彼是言ふべき資格無き門外漢なり。然れども其事業に就きては多大の趣味を有する者なり。一體幼稚園事業なるものが未だ社會全般に其內容の明確に徹底せざる點よりして、種々なる誤解を招き、批難を起す事尠少ならずとす。從つて其價値の如何なるものなるかを認められざるなり。之れ斯道の爲め最も遺憾とする所なり。

二、

幼稚園を參觀する者、一は保育の周到懇切なるを感謝するあり。或は其設備の足らざる事及恩物使用法の沒趣味、幼兒の取扱の事どもを以て幼稚園敎育の効果を疑ふ者もあり。然れども是等社會の人、參觀者と雖其多數は幼稚園其物を彼是言ふに非ずして、其保育方法の拙なるよりしてこれ等の事に事を寄せ利害關係を論ずるならんか。將又保姆の人格如何を言ふにあるか。然り方法としては、幾らも改良する點なきにしも非ずと雖、變化の本體を一種の如く考へ、或は保姆の眞想を知らず所謂皮想の感を以て幼稚園全體を評價するは、其當を得ざる盲評たるに過ぎざるなり。

三、

抑も幼稚園の事業は、家庭に屬し、學校敎育の範圍にあらず、家庭敎育の及ばざる所を補ふべき補助機關に過ぎざるなり。

然るに一般社會を見るに、家庭に於て幾分母の敎育の出來得る中等以上の幼兒の多くは幼稚園に

入れ、保育を受けしむるの傾向なり。家庭の空しからざる下層社會の幼兒が入園せざる狀態なり。此の如く生活上より、見ればさまで入園せしむる必要如何と思ふ者、却て保育を受けしめ、家庭に於て其日の勞働生活難に追はれ夫婦共稼ぎ晝夜營々とせるを以て、幼兒の保育は到底成し能はず爲めに、放任主義になし置くが故に、如何なる惡癖を感染するも之を監視し、保護する事能はず。あたら良萌芽も惡少年と交はり、不知不識の間に惡感化を受け、終生再び拭ふ能はざるが如き狀態に至る者少なからず。注意すべきは幼兒に於ける境遇、其交友なり。大都市に於ける裏長屋住、九尺二間の廊路住ひの幼兒は、遊ぶに所なく、物なく、況んや自然物に接觸する機會の少き家庭の多く立ち列ぶ町に至らば、幼兒の悲境實に同情に堪へざるあり。此の如き境遇にある勞働者、貧困者其他の幼兒を多く收容し、慈善的に市町費を以て適當に保育を施すは目下の急務にして且つ將來益激甚なる生存競爭の來るべきに於ては更に其必要を明はざるを得ざるなり。是等下層社會の幼兒を保育するは、間接には家庭の生產力を高め、直接には幼兒の心身の發育に多大の効あり、大都市の事業とし、機關として、此事業の增設を望むや切なり。彼の神戸に於ける戰後紀念保育會及大阪の愛染保育所の如き卽之れなり。

四、

近來惡少年、不良少年は各都下共に漸次其數を加へ、出沒、犯罪の巧妙なる事屢々聽く所なり。之れが爲めには感化院等の設けありて、府縣費數萬金を投じて之が感化に努力せらるゝも、其結果は、感化の目的を達せざるのみか、益墮落せしめ、少年泥棒の巢窟となりて、善美なる活模範を與え或は善良なる感化の稍不可能なるは事實なり、此の如き現狀にては完全に根本的に其精神を改造する事能はざるなり。

之れ不良少年の原因は、先天的に其一因ありと

雖、就中後天的たる境遇交友を始めとし其幼兒敎育の周到ならざりし點にあり。他の惡少年と交はり、不知不識の間に惡感化を受けたる者あり。此の如きに、莫大の費を徒浪し其結果の不良を見るよりは是等は適度の範圍に止め、進んで如上の保育所を各所に增設して、フレーベル主義に從ひ、下層社會の幼兒に善良なる保育を受けしむる事に努むるは、現下社會の要求にして、將又、大都市の當然設くべき事業の一たることを信ず。吾人は之れが大都市各地に先帝紀念事業として增設せられんことを絕叫し希望する次第なり。

○坊や創作

若き父

坊やは今月の末で滿三年と三ヶ月になる。例によつて早くから眼を醒まして、お父さんにお話をして頂戴とせがむ。今朝はお父さんが聽いて上げますから、坊ちやんがお話をして頂戴と賴んだら、熱誠をこめて何かしきりに獨り言を云つて居る間に、獨り手に次のやうなお話が發展して來た――

『小さい蟻がピョーンとお馬に乘りました。お馬はパカ〳〵〳〵〳〵セン〳〵〳〵〳〵パカ〳〵〳〵〳〵と走りました。蟻は小さいんですから、又ピョーンとお馬から墜ちました。蟻の小さい小さい眼玉は夢を見ました。向う一のお山に兎さんと龜さんと居りました。狸は龜さんに打たれて痛い〳〵と泣いたら、兎さんのお母さんが「どうしたのと」聞きました――』

此の次に坊やの云つた事は、全然右の話とは違つた系統のものであつた。話から夢になり、夢の中の話から又更に話が發展して、之れから之れへと思想が疾走して行くので、記者の生活に慣れない且つ不用意の父さんは、坊やが獨り言を終つた時までの全體の筋を捕へて置く事は出來なかつた。

同一系統に屬する材料を、記憶の働きで締め付けて前後の纏まりを保たせながら、一つのお話を自分で作り出して行くまでには、今後どの位の時を要するであらうかなど考へて、父さんはのん氣に坊やのお話を聞いて居る。

ゆるい春の疲れを味はいながら、父さんは坊をかゝへて、まだ伸び〳〵として床中に身を横へて居る。今朝は雨降りの日曜である。雨のせいか、一昨日も昨日も來て歌つてくれた鶯は未だ來ない。もう春雨らしくしと〳〵と降る細い雨は、油のやうに軟かい土に滲み通つて居るらしい。

――二月二十三日朝――

去月神田區に於ける大火には本會々員中類燒近火の災に罹かれし方も尠からず。玆に誌上を以て御見舞申上げます。

フレーベル會

ゴルドン女史著
菅原敎造譯述

美學講話

全十八講

『婦人と子ども』附錄

第一講　入門
第二講　心像の話
第三講　感情の話
第四講　藝術の起原と職分
第五講　リズムの話
第六講　舞踊の話
第七講　音樂の話
第八講　色彩の話
第九講　線と形の話
第十講　圖案の話
第十一講　建築の話
第十二講　彫刻の話
第十三講　繪畫の話
第十四講　言語の話
第十五講　詩の話
第十六講　戲曲の話
第十七講　散文の話
第十八講　美と藝術

第三講　感情の話

上　要素感情の話

―目　次―

感情とは何ぞや――要素感情又は單一感情とは何ぞや――意識要素とは何ぞや――要素感情の屬性――感覺の時限及反覆と要素感情との關係――感覺の强度と要素感情との關係――苦痛とは何ぞや――心的生活に於ける苦痛の意義――苦痛と不快――快及不快の職分――藝術に於ける苦痛及び不快の意義――美的快感

下　情緒の話

―目　次―

情緒とは何ぞや――反射動作とは何ぞや――本能動作とは何ぞや――衝動とは何ぞや――ダーウィンの情緒說――ジェームスの情緒說――デューイーの情緒說――情緒卽ち撞着せる衝動或は阻止せられたる活動力の意識――情緒に於ける運動的態度――情緒の內容の比較的單一なること――情緒の職分――有意的情緒及び藝術によつて喚起せられたる情緒

上　要素感情の話

感情とは何ぞや　感情に關する大體の事は第二講の初め「精神作用の知的方面と情的方面」と云ふ所で述べて置きました。元來吾々の感情生活は非常に複雜なものでありまして、普通に感情（フィーリング）と云ふ言葉の示す經驗の中でも、或は情操（センチメント）と云はれて居るやうな、例へば宗教的情操・倫理的情操・

論理的情操・美的情操のやうに、高尚な知的な感情もあります。從てこう云ふ心的作用は、情操と云ふよりは寧ろ意識と云ふ言葉を用ゐて、たとへば美意識・宗教意識と呼びなす方が却て普通であります。又情緒（エモーション）と云ふやうな、例へば喜怒愛樂のやうな強い感情もありしやう。この情緒の更に強いものを特に激情（パッション）と稱し、情緒の極めて弱い其餘波のやうなものを氣分（ムード）と名けます。或は又感覺感情（センスフィーリング）のやうに、例へば色や音を經驗した時の直接の感情とか、飢を感じた時の感情と云ふやうに、感覺と密に合して分ち難く成つて居る感情もありましやう。斯う云ふ總てを總稱して感情と云つて居るのであります。

併し乍ら、此の情操にして情緒にしても感覺感情にしても、決して純粹なる感情的の經驗のみが表はれて居るものではなくして、皆な知的の認識的の作用を含んで居るのであります。例へば日沒の光景を觀て崇高なる宗教的情操を起したとすれば、其眼に映じた光景は卽ち知覺の働であり、此の光景に附從する深遠なる宗教的內容は取りも直さず或る觀念卽ち複雜なる心像であります。又或人と爭つて憤怒の情緒を起したとすれば、其爭つた時の光景は心像として、又憤怒に伴ふ身體的變化は感覺として、怒りの情緒と密に融合して居るのであります。

要素感情又は單一感情とは何ぞや　斯る混合物の中から、知的認識的の作用卽ち感覺とか知覺とか心像とかを全く捨てゝしまつて、純粹に感情的の成分なり要素なりを殘して、其要素を玆に取り出したと假定すれば、其者を要素感情（アッフェクション）とも單一感情（ブルフィーリング）とも稱するのであります。卽ち最も簡單なる感情で、快（プレザントネス）・不快（アンプレザントネス）と云ふ狀態を指して云ふのであります。或學者はこの快・不快の外に、更に興奮・沈靜とか緊張・弛緩とか云ふ要素をも加へて居りますが、此の本では快・不快の二方面に限つて居ります。

意識要素とは何ぞや

右に述べたやうに、感情的生活全體に通じて、其情的の分子・因子・基礎・要素と云ふものを取り出して、是を要素感情又は單一感情と名けるのは、丁度第二講で知覺の作用を分折して、其材料又は要素として感覺を取り出したのや、記憶・想像・聯想など云ふ觀念(表象)を構成して居る基礎又は要素として心像を取り出したのと、全く同じ遣り方であります。今假りに情操・情緒・感覺・感情、又は知覺、又は記憶・想像・聯想など云ふ意識作用——複雜なものであるから意識複合體と呼ぶことも出來る——を、無機有機の化合物と見做せば、要素感情や感覺や心像は、斯る複合體を構成して居る元素である要素であると云ふことが出來ましやう。故に心理學では、此の要素感情・感覺、心像の三つ——或學者は要素感情・感覺の二つ——を、意識要素と稱して居るので、斯る要素が相合し相結んで意識と云ふ複合體を組立てゝ居ると見るのであります。

混合したものから引離して取り出すと云つても、決して實際の經驗を離れると云ふ意味ではありませぬ。故に感覺や心像は客觀的の知的認識的の精神作用の特徵を示すと共に、要素感情はやはり主觀的の情的の心的活動の大體の特徵を語つて居ります。

今まで述べたやうな感覺・心像・要素感情と云ふやうな意識要素の話は、發達した人の精神作用を靜的に見て是を分折し解剖した結果であります。最近の心理學では、是以外に「思考」と云ふ要素を設ける人もありますけれども、これは未だ一般に認められては居りませぬ。

次に觀察の立場を少し變へて、精神作用を發生的に見、動的に見て、心的活動の大本となる働きは何かと云ふ事を考へて見ますと、これは本能・衝動等の作用でなければなりません。勿論此の衝動も本能も、今まで述べたやうな遣り方で分折して了まへば、成る程、感覺と心像と要素感情の三つ

に分けられはしますけれども、これでは精神作用を活動的・發生的に見た特徴が失はれて了ひます。

感情に就てもやはり其通りで、今情緒を研究すると致します。一方では情緒を靜的に見て其構造を解剖して、感覺なり心像なり快不快の要素感情なりに分析して見なければなりませんけれども、又他の一方では其動的方面にも注意して、情緒の起原とも云ふべき本能や衝動との關係を調べなければなりませぬ。此の點に就ては本講の下「情緒の話」に於て精しく記述してあります。

要素感情の屬性　要素感情の屬性は强度、時限及び性質の三つであります。

先づ空間的屬性から申しますと、要素感情は空間的の廣がりを表はして居りません。此の點に於て要素感情は、視覺・觸覺及び筋肉感覺などの作用とは違つて、聽覺・嗅覺・味覺及有機感覺の或物に似て居ります。

次に强度の屬性を申しますと、要素感情には强度の階級が澤山あつて、極度に强いのから至極穏かな所迄、程度の差がいろ〳〵あります。感情の神經的基礎の動かされ方が少なくつて、殆んど感情が意識されるに至らない位の時には感情が閾下にあると申します。之に反して氣絶する位酷く興奮させられる時もありますが、此の場合には感情が頂を過ぎたと申します。

次に要素感情の時間的屬性に就いて申します。元來要素感情の時限が感覺の時限よりも調査が困難なのは、一つには刺戟の調整が困難だからであります。例へば色の場合ならば、一點の青を見せて又引込める時を注意するのは容易でありますが、青の快感を起すに十分な刺戟と云ふと、非常に復雜な問題となります。同じ一點の青が感情を招致する事は事實でありますが、少しでも情況が變つて居れば左樣は行きません。感情が現出し清滅する瞬間を明確に指示する事は殆ど不可能であります。

最後に要素感情の性質的屬性に就て申します。是は心理學者の間に中々異論のあるやかましい問題で、或は要素感情の差は快・不快と云ふ二つの團體に大別され、快の團體は更にいろ〳〵の快を含み、不快の團體の中には更にさま〴〵の不快が分化されて居ると說いて居ります。又或學者は快・不快の外に、更に興奮・沈靜と云ふ二團體の性質的の差を認め、又他の或る學者は快・不快、興奮・沈靜の外に更に緊張・弛緩と云ふ二團體の性質的の差を認めます。これを一と纏めにして表にすれば次のやうになります。

感情の性質上の差			
一般の學者	快・不快		
ロイス氏	快・不快	興奮・沈靜	
ヴント氏	快・不快	興奮・沈靜	緊張・弛緩

又この快不快にしても、快と不快とが混合して兩立すると說く人もあり、或はこの二つは全く正反對のもので兩立しないと云ふ人もあります。更に或人は快不快何れでもない中立の狀態があると說き又或人は快に非ざれば不快、不快に非ざれば則ち快で、中間の狀態は存せないと云つて居ります。

感覺の時限及反覆と要素感情との關係　凡そ生きて居る限りは、如何なる瞬間と雖も、吾々の精神作用は、必ず感情と認識とが相伴ふて居るものであります。例へば感情の方の「快」「不快」の判斷と云ふものは、多く色とか音とか味とか云ふ特殊の感覺の働卽ち認識的の作用に就て下されるので、其の認識的の働の時間が、やはり又感情の時間なり强度なり性質なりに影響を及ぼすものであります。

非常に短かい感覺的刺戟は概して不快になり勝ちでありますが、これは判然と分らぬ中に消えて了ふからで、つまり戲弄された樣な氣持がするからであります。又非常に長い刺戟もぢつと氣を留めて居ると、遂には不快を生ずるのは、假令其の

刺戟は惡くないにしても、飽きが來て苦痛を起す事もあるからであります。

刺戟を繼續する代りに間を置いて反覆する時は又別であります。併し餘り早く反覆されますと、チラ〳〵する光の樣に甚だ不快な感じを起させますが、長い間を置いて繰り返しますと、後天的趣味の場合と同じく、漸次に愉快となつて來るものであります。

感情は、引切なしの刺戟又は繁く繰り返される刺戟には順應と云ふ傾向があつて、此の順應と云ふ傾向が勝つと、無頓着になつたとか、鈍くなつたとか、馴れて了つたとか云はれます。

感覺の强度と要素感情との關係　極めて微弱な感覺的刺戟は、認識的方面から云つても知覺し難いもので全然氣附かれない事もあります。感情的方面から云ひますと、幾分不快な感じを起すものである事は、一般に通じて云はれて居る處であります。併し極端に强い感覺的刺戟も亦不快で、甚しい時には苦痛とさへなる事もあります。

要するに快感を得んが爲めには、時間も中庸で無ければならぬと同樣、强さも中庸を得なければなりませぬ。感覺の働と感情の作用とは、同一法則に從ふのでは無いと云ふ事は、前にも申しました通りで　この强度の場合に就ても知る事が出來ます。

苦痛とは何ぞや　苦痛其ものは感情ではありませんが、感情生活との關係の密接な點に於て、感覺中比類のないものであります。

苦痛は極めて純粹なる單純なる感覺でありまして、普通によく切る、火傷する、抓る、刺すと云ふやうな言葉で說明されて居ります。併し斯樣云ふ言葉は、苦痛に伴ふ經驗とか苦痛を起す手續とかを表示するに過ぎないので、苦痛がどんなものかと云ふ事は、其起つた刹那を指して見せる外說き樣がありませぬ。凡ての他の究極的性質同樣、例へば靑い色は、實物を示して「是れです」と云ふ

か、「青はやはり青で、青以外のものでありません」と云はなければならないやうなもので、苦痛と云ふものもやはり經驗して始めて知る事の出來るものであります。又他の感覺同樣、これは幾分か正確に局限する事が出來ます。

元來苦痛は知的の作用に對するよりも、情緒に對する關係の方が遙かに密接なので、情緒と同じく、强度と衝動力とを特徵として居ります。そして爭鬪と名けても良いやうな情緒の働は、苦痛を包含する事も珍らしくはありません。

又苦痛の生理的隨伴作用は情緒の基礎の如きものであります。總じて如何なる種類を問はず、强い情緒の起る時には、生理作用が一般に擾亂されて來るものでありますまして、呼吸・血液循環・分泌等に異變を來し、失神・戰慄・嘔吐等を催す事さへあります。そして是等の生理作用は劇痛にも必ず伴ふもので、呼吸の不齊・鼓動の變・涙・汗・戰慄・吐氣などは誰しも經驗のある事であります。苦痛は其の辛辣急迫の處が感覺中第一位に居りますから、隨つて强度も第一であると云へます。

心的生活に於ける苦痛の意義　劇しい痛み程不快の確なものはありません。隨つてこれは必ず注意と心的活動とを刺戟するものであります。苦痛の特徵と云ふべき處は、凡ての心的過程中、比較の標準、又は價値の尺度に最も適して居ると云ふ事であります。

これには亦原因があります。第一に苦痛は我々が日常よく經驗するので、認識も評價も非常に容易なる單一明白なる感覺であります。次に苦痛は强度の範圍が非常に廣く、輕微なる苦痛より劇痛までの活段が非常に多いものであります。最後に、苦痛は凡ての經驗中最も反應を起し易いものであります。

勿論如何なる精神作用でも、物理上の標準ほど固定不變の關係を持つて居るものはありませんが、併し苦痛は精神作用中では最も不變なもの、

様に思はれます。其證據として、苦痛を價値又は興味の尺度に使ふと云ふ事は、以下の例で推す事が出來ます。蠻族の仲間では一人前となる前に或苦しい式を經なければなりません。又中世の禁欲主義の隱者は其の忍んだ難澁が酷ければ酷い程神聖視されたのであります。亦人が或物に對して拂ふ注意の度、若くは其物の面白さは、人を其物から引放す爲めに使ふ苦痛の度に依て大體分かるのも事實であります。

故に苦痛は單に行爲を刺戟するもの、及價値としてのみならず、又快樂の度を試めす役をも持つて居る者であります。苦痛が在ればこそ快樂の存在に意義も特質も出來るのであります。如何となれば、物を辨別せんが爲めには、何かその相手となつて對照される者が必要であるからであります。

苦痛と不快　苦痛は感覺であり、不快は要素感情であります。苦痛ならぬ不快はいくらもありますが（拙い色の配合の如き）、苦痛は不快に極まつて居るといふのは、如何なる場合にも事實であります。

苦痛の不快より確なものは無いと上に述べましたが、これにも例外は在るので、藝術起源の研究者として有名なる瑞典の美學者ヒルンの如きは、苦痛の鑑賞まで論じて居ります。故に輕微な苦痛は時により、人に依つてはかなり歡迎されるものらしく思はれます。

快及不快の職分　調和よく働く活動と爽快な氣持、亂調子な活動と不快な氣持との間には、密接不離の關係があると云ふ事は、一般に認められて居る處であります。例へば上述の如く程よい刺戟は、强きに過ぎ若くは弱きに過ぐる刺戟よりも快い結果を齎らす如きであります。次に快不快の心持は或行爲が妨害を受けたか受けないかを表示するものでありまして、快とは何物かゞ人に合適すること、不快とは合適せぬ事であります。もう一度言ひ換へすと、不快とは低められ又は狹められた活動力を意味するのであります。

それ故若し活動力相互の間に紛爭が起れば、何物かを除去しなければならぬと云ふ事は、今迄人の云つた言葉でありますが、併し又其の反對に、紛爭は却て廣き包含的な活動を意味するものであり、興味の多い人程その面倒に好んで携さはると云ふ事が出來ると思はれます。

又快樂は心的活動の全般にわたつて刺戟を與へるもので、幸福な時には考が餘計出て來るものであると一般に云はれて居りますが、これも反對で、快樂の爲めに心が懶惰になる場合もあります。

藝術に於ける苦痛及び不快の意義　苦痛・哀愁・沈鬱等が加はつた爲めに、今までの平凡なものや詰らないものが變じて、純清・威嚴・麗美等の面目を備へるやうになる事は珍らしくありませぬ。苦痛及悲哀は畏懼を起させるものであります。世界最大の悲劇の一と云はれて居る希臘の詩人ソフォクレスの作「エディプス」のやうな劇も、主人公の苦痛が人の注意を惹き且悲劇の骨子を成して居るので無ければ、只ゴタ〳〵した事件を列べ立てた詰らぬものに過ぎません。ゲーテの傑作「ファウスト」の上卷に現はれた無邪氣な愛らしいマーグレットの悲曲は、如何にも哀な美しい物語ではありますが、同じマーグレットがたゞ可愛い無邪氣な娘ばかりで有つたなら、果して斯う云ふ藝術上の取扱ひをされたか如何かは疑問であります。英國の詩人たり美學者たるラスキンは「眞の美は凡べて悲哀を帶びて居るものである、美しいものが憂鬱を失へば、それは單に綺麗といふことに墮落して了ふ」と云ひ、夭折した佛國の天才美學者ギュヨーは「高尚な美的情緒には必らず何等かの悲しみの影が添うて居る」と云つて居ります。此の苦痛の價値に就いては悲劇の處で又た論じませう。

美的快感　藝術は少くとも其の感覺的若くは形式的の方面に於て、必ず幾分の快感を與へやうとして居るものであります。藝術上の快感の特

質は後に論じますが、實際此の快感を起させる形式の研究は、やがて感情其物の研究となつて來るのであります。

下　情緒の話

情緒とは何ぞや　情緒は構造から申すならば、要素感情と丁度正反對に立つもので、卽ち非常に複雜なものであります。要素感情のやうに、單なる快不快のみならず、多くの筋肉感覺や有機感覺又は心像を包含して居るので、要するに經驗が非常に豐富であります。此の多種多樣な肉體感覺の演ずる所を了解しやうとするには、情緒の研究を其の起源たる反射的動作及び本能的動作から論じて懸からなければなりません。

反射動作とは何ぞや　吾々の心身の組織の中で、最も基礎たる土臺となるべきものは、或種の運動が絕えず續いて居ると云ふ事實であります。そしてこの運動は、大抵有機體を其の四圍に適合させると云ふ事を究極の目的として居ります。中でも循環呼吸消化のやうな運動は、絕えず而も極めて規則的に起つて來まして、これが人間存在の核心となつて居るので、かう云ふ運動に依て、人は四圍に供給せられた空氣食物等を利用する事が出來るのであります。此の三種の運動は誕生と共にあるもので、遺傳的反射作用と呼ばれて居ります。もつと後に現はれて來ますけれども、噴嚏・目ばたきの如き作用も、やはり遺傳的反射作用であります。

今一種の運動は、最初は意識的に獲得したものではありますが、これも餘り繁く行はれたが爲めに、遂に無意識になつたものでありまして、これを遺傳的の方に對して後天的反射作用と申します。遺傳的及後天的反射作用は行つて了つた後には氣がつきますが、意識的に刺戟されるものではありません。

本能動作とは何ぞや　本能動作は起原は遺

傳的反射作用と同じでありますが、性質はもつと複雜で又其の目的を達せんが爲めには意識的な工夫を要します。たとへば人は大きな動いて居る物に出會へば逃げる傾向があつて、これは遺傳的の作用ではありますが、併し是を實行する時は、既に意識的の計畫が含まれて居ります。又激して居る時には、戰ふ本能がありますが、それを果たすには打つ、扭ぢる、引く、突くなど極めて複雜な運動を要します。

こゝに今一番重立つた本能を擧げれば、羞耻心・秘密性・好奇心・社交性・得財心・競爭心・嫁妬・兩性及親の愛・遊戯・模倣・建設等であります。そして最後に擧げた三つの本能は、美學上特に重きを爲すものでありますから、簡單に說明を加へておきませう。

遊戯はエンジェルの定義によれば、隨意筋の自由にして爽快なる且つ自然なる活動で、通常は「餘剩精力の放散」と認む可きものであります。遊戯をして居る中は子供も大人も衣食住を直接稗益せぬこと、即ち單なる生理的存在には必ずしも必要では無いことをして居ると云ふ點に於て自由なものであります。もう一つの意味から云へば、遊戯活動は最も有用なもので、小供等に社會團體の所行を敎へるものであつて、服從・共同・指導等の敎訓は此の中に得られるのであります。して見ると遊戯は通常精力の指針であり、且同時に其の精力を將來の行爲に影響させる資本となるものであります。

模倣は遊戯の形として現はれる事もよくありますが、併し遊戯本能の働いて居らぬ時に現はれることも珍らしくはありません。元來模倣は人間の總ての傾向の中で最も根深い且抗拒し難いものであります。例へばつい少し前迄話をして居た人の話や樣子や表情を眞似るのは誰でも始終やつて居る事であります。人の眞似ばかりでなく又無生物の眞似もよく致します。例へば波の搖れる樣、風に靡く秋草の姿、櫻の散る樣子などは、いつとな

しによく吾々が眞似て居ります。此の模倣本能は藝術の鑑賞上最も肝要なものであると云ふ事は猶後に申します。

建設本能は或意味に於ては模倣の正反對であります。これは四邊のものを繰り返すより掌ろ變改する傾向で、或形に出來上つて居るものをばら〳〵に引き放したり、又は別の形に組み立てる事であつて、藝術家に新奇な心像の表はれる時は不知不識働いて居る本能であります。

衝動とは何ぞや　衝動とは活動せんとする傾向の意識で、今御話した本能が意識されると云ふのは、つまり衝動として感ぜられるのであります。又反射運動が將に行はれやうとする時に妨止されると、それは最早純然たる反射作用では無く、衝動として意識に表はれるものであります。元來衝動は意識界の一特殊部門を占めて居るものでは無く、あらゆる心的狀態の動的方面と見るべきものであります。それ故此の關係を言ひ換へますとあらゆる思想及あらゆる心的狀態は、衝動力を持つて居ると云ふのと同じ事であります。つまり思想があるからには必ず活動が伴ふ、即ち凡ての思想は何等かの活動に對する思想であると云ふ事が出來るのであります。

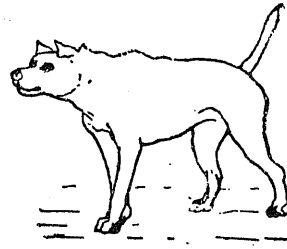
ダーウィンの情緒說　有名なる英國の進化論者ダーウィンの情緒の說は以前廣く行はれた說を代表して居ります。即ち身體的態度は或精神的狀態の適應の結果であるといふ意味から、情緒の「表出」であるといふ考であります。この說に從へば、拳を固めるのは怒る時に通常やる事であるから、憤怒を表現して居ると云ふ事になります。

ダーウィンは表情の三則を明示致しました。

第一則は利用的聯想の習慣の原則であります。曰く「或感覺や欲望などを輕減したり又は滿足させたりする爲には、一定の心的狀態のもとには、或複雜な行爲が直接又は間接に役に立つ、さうすると何時でも又如何に弱くとも、同じ心の狀態が誘

致されると、習慣及聯想の力に依て何の用は無くとも同じ運動をする傾向がある」と。故にいやな考を懸命に追ひ除ける時は、實際に物を逐ひ遣る時に使つた動作を其の儘やるものであります。例へば目を閉ぢ顔をそむけ、手で押し遣るなどは、過去に於て不快なものを追ひ遣つた反應なので、聯想に依て殘存して居ります爲めに純然たる思想的のものに對してもこれが起つて來るのであります。

第二則は反對の原則と云ふのであります。曰く「或心的狀態は或習慣的動作を誘引しそしてその動作は第一則で述べた樣に働くものである。次に正反對の心的狀態が生じた時には、何の役に立た無くとも正反對の動作をする强い自然的傾向のあるものである。」此處に掲げた二つの犬の圖のスケッチは、ダーウィンがこの反對を示す爲めに用ゐたものであります。



第三則は神經系統直接活動の原則と云ふので、もつと精しく云へば「最初より意志とは沒交渉にして、或程度迄習慣とも無關係なる神經組織に基く行爲の原則」と云ふのであります。此の題のもとには、ダーウィンが意識狀態の結果とは認めて居らぬ情緒の隨伴現象、卽ち戰慄・鼓動の變化・腺分泌等がはいります

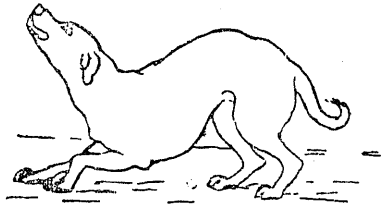
ダーウィンより後の學說は、此の第三の原則に重きをおき、第一の原則中の動作の或物は、本能的反應の中に入れました。

ジェームスの情緒說

先年歿した米國ハーヴード大學のジェームスの有名なる情緒說の中心點は、情緒に伴ふ「身體的變化は或事實を知覺すると直に起るもので、その身體的變化の起つた時の感が卽ち情緒なのである」と云ふのであります。之をシカゴ大學敎授エンジェルに云はせると、「人は冷然自若として居つても恐ろし

い物、又は危險なものを理解することは出來る。併し恐怖の特質たる運動的反應と行つた後で無ければ、決して恐しいと感ずる事は無いものである」と述べて居ります。此の說の効果は情緒に伴ふ生理的變化の意志的性質を排して、本能的性質に重きをおいた所にあるのであります。

尤もこれは、人が情緒を得る前に、さう云ふ生理過程が、明白に分離した認識的要素として意識されると云ふ譯ではありません。卽ち人ははじめから「私は慄へて居る動氣が激しい、呼吸が不規則だ」、など、考へてから恐怖を感じるのではありません。併かし丁度彼の色彩刺戟の赤が網膜及神經中樞に働いて後（人はこれを認識しません）に赤の感覺が起る樣に、或他の身體器官（人は別にこれを分析はしません）が恐怖の感を起させるものであります。



デゥヱーの情緒說　米國コロンビア大學敎授デゥヱーは情緒は元來撞着せる衝動の意識であると稱して居ります。そして情緒は不規則の呼吸・戰慄等の如き身體的變化の生ぜぬ前に起るものではないといふ點に於て、デゥヱーはジェームスと同說であります。又左樣云ふ身體的變化及姿勢は、以前は（種族として）必要であつた遺傳的反應の結果であると云ふ點に於て、ダーウィンとも一致して居ります（此點に於てはジェームスもダーウィンと同說であります）。

併しデゥヱーは左樣云ふ姿勢をとる本能的傾向は、情緒の感ぜられる前に阻止されなければならぬものだと申して居ります。此の本では氏の說をとりますから、以下此の原則を說明致します。

情緒卽ち撞着せる衝動或は阻止せられたる活動力の意識　人は何をするにも總てうまく行くならば、恐らくはどんな人でも純然たる習慣的の

生活を送つて、如何なる問題にも惱まされる事もなく、又勉强するにも及ばず、新らしく物に適應する方法を工夫する必要もありますまい。何もかも呼吸同樣樂に無意識に遣つて行かれませう。

併し人は活動を阻止され、目的物と隔てられた場合にのみ、それを深く考へもし、感じもするものであります。爭鬪を例に惹いてもつと精しく申しますならば、今甲の男兒が乙の男兒を打つたとします。その場合に乙がすぐ甲を打ち返せば、勝つた方の兒は當然何等の憤怒も感じません、如何となれば其人は純然たる本能の督勵に從つて自然な終極まで行き、而も其間何の障碍も無かつたからであります。然るに其の反對に禮儀作法のため、もしくは相手の大きいのに氣が引けて手の出せぬ時、卽ち爭を好む本能が阻止された時には、乙の兒は憤怒の情緒を經驗するのであります。此場合には本當は動作に出づ可き筈の力を自身の中に籠めて了ふので、そこに擾亂が起るのであります。

今一つ例を擧げて見ましやう。玆に多忙な甲と云ふ人に逢はうとして待つて居る乙と云ふ人があるとします。乙は甲に話さなければならぬ事、又甲から聞かねばならぬ事があるとします。乙は衝動に引かれてそこまで行つたので、話すと云ふ事の外何も外に目的がありません。一秒一秒と時は經つ中々待つ人はやつて來ない。乙は爲る事は無い、從つて衝動の出口が無い、その結果ぢれていら〳〵して來ます。而して最後には大抵むつとして腹を立てゝしまひます。

此場合には中間の未決狀態に依て生じた狀態が主として働いて居ります。そしてその未決狀態をよく調べて見ると、甲に話さうと云ふ一つの衝動のみならず、もつと外のもの、卽ち待つて居る間の時間を埋める事の出來る外の活動が阻止されて居ると云ふ事實を包含して居るのであります。故に人の憤怒は衝動の爭ひを表示して居るものと見なければならないのであります。もつと精しく云ひ

現はせば、一定の活動に依て放散せらる可き筈の精力が、放散されずに全局に停滯して居る樣に思はれ、そこに憤激と情緒とが醸されるのであります。

猶一例を擧げるならば、恐怖の場合に眞に恐ろしく感じさせるものは逃げんとする第一の衝動の阻止であります。夢の中でも、キャッキャと云つて馳けたり逃げたりする事の出來る中は、決して追かけて來る妖怪や魔法使を恐いと思ふことはありません。只だ何かに引きとめられたり、又は身體中がしびれた樣な感じのする時、始めて非常な恐怖を經驗するものであります、其の無力無能の瞬間が强烈なる情緒の瞬間なのであります。

情緒に於ける運動的態度　衝動は行爲せんとする傾向であるとすれば、衝動の究極の成功及實現は何であるかと云へば、或纏まつた明白な行爲又は或行爲の特殊の改修と云ふ事であります。無論衝動はその働いて居る最中に、何處でゞも破壞する事は出來ます。併し衝動が中止された時には、其衝動行爲が完成された時に起つて來べき姿勢が――少くとも一部は――必ず現はれて來るものであります。若し二つの衝動が衝突すれば、二つの運動狀態の間に爭ひが起りますが、身體の各部は一時に二つの相異る姿態をとる事は出來ませんから、二者に共通の要素、若くは兩立し得る要素のみが殘るので、そして其の姿勢態度は大抵或標型的原始的反應に現はれたものであります。

猶例を擧げてもつと精しく御話致しませう。憤怒の情緒に就て申しますならば、此の情緒にはいろ〳〵の衝動、たとへば、亂暴な事を云ふとか、間接に殘忍な事をするとか云ふやうに、いろ〳〵の衝動がありましやう。併し其等凡ての背後に潛み且凡ての一部となつて居るのは、齒と爪とを以てする古い原始的反應の遺物でありまして、要するに憤怒と云ふものは、イヴン狂暴王の殺氣滿々たる憤怒より、最も神聖な公憤に至る迄、反抗、

反對、及破壞の共通的企圖を持つて居るものであります。そして亦これを實行するには、拳を固め、下顎を角ばらせ、胸及び咽喉が膨らむ樣な、突き出す樣な運動が始りであります。かう云ふ運動は一面から見れば、或は原始的行爲の殘物に過ぎない無用のものであるとも云はれませうが、併しもし情緒と云ふものが必要であるとすれば、左樣云ふ反應は文明人にすら極て必要であると云はなければなりませぬ。如何となればかう云ふ反應は情緒の基礎であり、是が無くては純然たる思想上の事物に對する抗拒すら爲し難いのであります。

猶羞耻の情を例に惹いて、もつと精しく御話致しましやう。この場合に最も勢の强い反應は、再び斯樣云ふ破目に陷るまいと云ふ內心の決意許りの樣にも見えませうが、併し其時すぐに現れる姿勢、卽ち人目を避けて逡巡し、顏を隱さうとする態度は、凡ての羞耻の形に共通の點となつて表現して居るのであります。而して斯う云ふ情緒が無かつたならば、人は果して內心で決意をするか如何か疑問であります。

情緒の內容の比較的單一なること　强い情緒の襲來は人を盲目にするもので、激情は是非善惡の差別を失ふものと通常云はれて居ります。衝動の對象は極めて概括的な實行し難い形式に於てのみ心に存在するもので、碎いて云へば何を欲するかと云ふあてが判然として居りませぬ。もつと精しく云へば、熟考を經た行爲の方案と云ふ樣なものは無いのみならず、却つて實行し得可き方案又は心像の不足缺乏と云ふ事が、情緒に缺く可からざる要件なのであります。若し相反する衝動の兩者を代表する具體的な詳細な方案が出來たとすれば、其の時は感情の高潮期は既に過ぎ去つて了ふのであります。

尙感情の盲目の一證據は半病理的の場合に徵する事が出來ます。卽ち一旦起つて而も頑强な抵抗に遇つた感情は、色々の方法の中何れかに依て滿

足を求めます。荒れ狂つて居る人は、荒れ狂つて居る獸同樣、何でもあれ始めて出會した物に怒りを浴びせ懸けるもので、或一つのものに對する複讐が延いて只だ一般の破壞を目的とする樣になるのであります。

情緒經驗の單純な事は、別々の人でも感情に大差はないのに徵しても明らかであります。人の知る如く、情的同感は智的一致より迅速に且容易に擴がります。たとへば獸ですら、恐ろしい、悲しい、なつかしいなどゝ云ふ事は了解が出來ますけれども、他人の思想を了解する事は比較的少數の人にしか出來ません。要するに情緒は一個人を一種族と結合し、智力は一個人を一種族と區別するものと謂つて宜しいので、偉人は情緒の爲めではなく、その思想故に目立つのであります。

情緒は盲目であると上に申しました。これをもつと制限して申しますと、情緒は具體的細目に就ては盲目でありますが、それと同時に或一點に就ては明らかに物が見えます。精しく云へば、相爭ふ二つの衝動に共通の要素は、取り出されて强さを增して實現されるのであります。例へば直に破壞する事の出來ない關係に悶えて居る人があるとしませう。すると逃れんとして阻まれた衝動は、「何時か如何かして逃げやう」と云ふ決心の形、卽ち兎にも角にも逃げると云ふ一般的の意味になつて殘ります。故に情緒の內容にはこの一般的企圖の記號卽ち象徵がはいつて居ります。身體の態度の感情と云ふものは、つまり左樣云ふ象徵の役を務めて居るものであります。

情緒の職分　第一に情緒は代表的のもので、過去の經驗を代表する記號となるものであります。たとへば良心及趣味の情緒に於ては、過去の道德上と藝術鑑賞上の訓練——過去の經驗の象徵卽ち記號——が固結した糟となつてはいつて居ります。今或る實際の場合に當つて見るとします。其方向に於ける凡ての過去經經が、智的判斷とし

てのみ意識に現はれると云ふ事は決して出來ないのであつて、幾分は情的反應に依つて代表されて居るのであります。これは過去經驗の凡ては其の情緒を形作る事を助成したものであるからであります。

第二に情緒は經驗を統一し、且それを實際上に連續するもので、情緒がある爲めに、いろ〳〵の複雜な經驗に條理が立ち、且つ相互の間に聯絡が取れます。故に情緒の役目を一言に申せば、色々の活動を總括的な題目のもとに集めて統一すると云ふ事になります。尙例を擧げて述べるならば、說明が一度び愛・同情・嫉妬・恐怖・憎惡等に及べば、誰しも「成る程」「無理ならぬ事」と許してしまひます。卽ち斯樣云ふ情緒は、物事をする一般的且究極の「理由」、又は「根據」と認められて居る觀があるので、人は人の行爲の背後に潛む情緒を知る迄は、それを十分理解する事は出來ないものであります。

佛國の文豪バルザックはそのカタリーヌ、ド、メディシの研究中、カタリーヌの生涯に現はれた矛盾を解いて、それに依て理義透徹した明晰な長い歷史を編みましたが、バルザックは、カタリーヌの矛盾した行爲を解くには、その主權に對する熱望—權力の愛—を以てしたと云つて居ります。卽ちこの情緒に依てバルザックはカタリーヌを說明したのであります。

第三に情緒のある所には必ず新しい行爲に對する條件と刺戟とが伴つて居ります。如何となれば相反せる力と力との爭ひは、結局二者の何れとも異なる妥協を生ずるからであります。尙例を以て說明するならば、情緒の高潮せる瞬間は、全人格が激せられ全生涯の興味が一の新しい形に密接固着する瞬間で、たとへば彼の宗敎的大狂歡が生涯の變化を來すなども此の一例であります。極言すれば情緒は危機(クライシス)を意味し、クライシスは變化を意味するものであります。

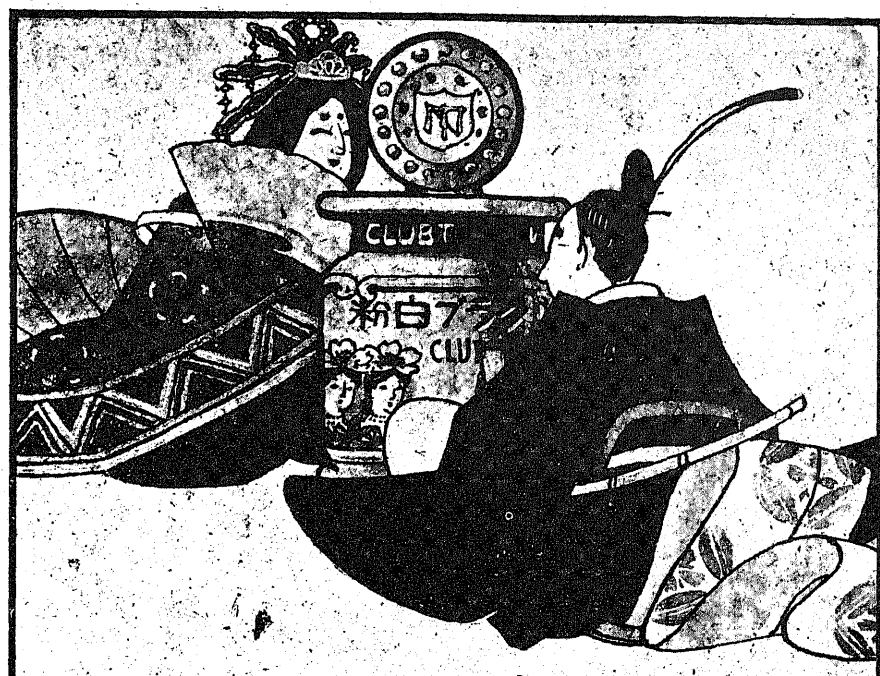
故に要言すれば情緒は、過去經驗を代表するものであり、種々の經驗を統一するものであり、又何等か新らしいことに對する刺戟となるものであります。

有意的情緒及藝術によつて喚起せられたる情緒

人は情緒を勝手に卽ち有意的に起す事が出來るものでせうか、又は自然に卽ち非有意的に二つの衝動が相抵觸するのを待つて居なければならないものでせうか。ジェームスの說に據れば、或情緒に適應する姿勢を取るのは、實地に情緒を起す捷徑であると云つて居ります。卽ち有意的に情緒を起す事が出來るのであります。それ故生理的變化を忠實に眞似れば眞似る程、十分に且純粹にその情を感ずると云ふ事になります。

人が感情を激動させるには通常その感情を構成する衝動に訴へます。元來其等成分たる衝動に對する有效な刺戟は何であるかと云ふ事がよく分かつて居らなければ、情緒を起こす事は出來ないのであります。故に藝術家が其の作品に依て人の情緒を刺戟しやうと云ふには、先づ觀照者の心に衝動を起させる工夫をしなければなりません。情緒の傳達に最も有力な道具は摸倣本能でありませう。例へば彫像なり俳優なりを見る人が其の姿勢を眞似る樣になれば、其人は既にその藝術の主眼たる情緒を生ずる第一歩を踏み出したものと云はなければなりませぬ。

〔正誤〕前號の北齋筆富士百景は上下顚倒して居りました。印刷の失態を謝します（編者）



内裏雛
箱より出で、
今日はクラブの
お化粧姿

塵ほこり
拂ひ清めて
今日は床しき
クラブの香

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可
婦人と子ども　第拾參卷第三號　大正二年三月五日發行

⊙先生隨分おもちやが來ましたね⊙どこから⊙これはね東京のフレーベル館から園長さんが買つて下さつたの⊙フレーベル館のおもちやはいーのね⊙先生々々僕シーソーにのせて頂戴⊙先生私に此のマゝゴト貸して頂戴

⊙先生之は何です之はね積木でもつて電車でも滊車でも出來て車があるからほらころがりませう⊙面白いな僕に貸して⊙あたいにもね先生先生〳〵〳〵

⊙僕にシングルベルス⊙あたいに球投

⊙先生此の馬は之は手綱を引くと前に進みますよ*

*君二人で競馬やらうおいこりや面白いな

⊙さあ皆さん少し靜になさい今先生が皆に貸してあげますから

⊙子供は可愛いものね

幼稚園恩物類
東京九段 フレーベル館
製造販賣
振替東京一九六四〇
電話番町二九〇九

印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場